

主体、欠如、反復

——レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ『ムツシユー・ニコラ』と虚構的自伝

森本淳生

レチフ・ド・ラ・ブルトンヌ（一七三四—一八〇六）は、生涯にわたって書くことに没頭し、膨大な量の作品を著した。その数はスラトキン・リプリント版『全集』（一九八七—一九八八）にまとめられたかたちで数えて一一三冊にものぼる。レチフにとって生きることと書くことは不可分であり、彼が実際に生きた人生は、その希望や妄想も含めて、変形されつつも作品のなかに定着されている。このように彼のテキストはそれぞれ程度の差はあれ「自伝的小説」と呼びうるものだから、〈作品〉を理解するには〈人〉を知ることが必要であるように思わせる。レチフは、一七八二年に第一部が出版されたルソーの『告白』（第二部は一七八九年刊）に大いに触発されて、みずからも〈自伝〉の執筆を試みた。一七八三年から八五年にその大部分が書かれ、その後も加筆修正を加えられて、一七九七年、幾多の困難のすえに印刷・出版された『ムツシユー・ニコラ、あるいは彼自身によって露わにされた人間の心』は、レチフ研究の泰斗ピエール・テスチュが述べるように、彼の文学を読み解くための「鍵^①」としてまず読者の前に現れてくる。

しかし、よく知られているように^②、また第一節でも本稿の関心にそってその一端を確認するとおり、『ムツシユー・ニコラ』は彼の人生の正確な記録ではなく、そこには多くの虚構が含まれている。フィリップ・ルジュンヌ的な

「自伝契約」にしたがうなら、自伝の語り手は自分の人生についてできるかぎり正確かつ誠実に語り、読み手はそれを共感的に読み取らねばならない。『ムツシュー・ニコラ』は建前としてはこのモデルを共有するが、実際には文学世界がしばしば〈自伝〉を浸食し、事実世界と混淆する。しかし他方で、にもかかわらず、このテクストはやはりレチフの人生を再構成するさいの第一級の資料であり、信用するに足りぬたんなる虚構と決めつけてしまうわけにもいかない。事実とも虚構とも決定しがたい曖昧なステイタスをもつこうした言説群をどのように読んでいけばよいのか。『ムツシュー・ニコラ』を論じるにあたって本稿では、テストチュをはじめとする研究者たちにならって、「自伝」というテクニカル・タームを用いるが、レチフ自身がこの語を使ったことはない。周知のとおり、「自伝」autobiographieという言葉は当時生成の過程にあり⁽³⁾、それは自己を語る言説をめぐるある歴史の変動と相関していたと考えられる。ルソーの『告白』に自伝的エクリチュールの「起源」をみるルジュンヌを強く批判したジョルジュ・ギユスドルフは、ルソーをカトリックの静寂主義的傾向や、とりわけプロテスタントの敬虔主義の系譜の中に位置づけ、一七六一年にルソーに回想録を書くように勧めた出版業者のマルク・ミッシェル・レーも敬虔主義的サークルに属していたのだと述べて、貴族の回想録とは異なる英独のプロテスタント的な自己表出（自伝、日記）の流れを指摘している。ギユスドルフによるなら、十七世紀から十八世紀後半にかけて徐々に生じた変化は宗教的自己表出の「世俗化」であり、回心と宗教的再生を主軸とした自己の物語は、その自己検討を次第に「心理学」的な内面分析へと向けていったという⁽⁴⁾。「宗教的要求の占める部分が減少すると、心理学の占める部分がそれだけ増大する。近代の文学的自伝は内面空間の脱神聖化から生まれることになるだろう⁽⁵⁾。」描かれるのはできごとというよりは「できごとが生じるにつれて変化する私の魂の状態⁽⁶⁾」となるから、自伝はいわば「新しい実験心理学」として現れてくる⁽⁷⁾。

レチフが『ムツシュー・ニコラ』で試みたのも、自己をいわば心理学的に「解剖」することだった（I, 380）。も

ちろんこうしたレチフの構えは、人間が心の弱さから不可避免的に陥る不幸な境遇を描きだすことで読者に教訓を与えようとする立場、たとえば『マノン・レスコー』の序文でプレヴォーがすでに語っていたような文学の道徳的有用性の主張と不可分である。「人間の心のさまじい、まな動機、仕組」 *ressorts du cœur humain* (*ibid*) を明らかにするのだと言うとき、愛や快楽を前にした人間の心の弱さを示すという伝統的詩学の枠組を超えて、レチフがどこまで意識的に、「心理学的」省察を行っていたかは必ずしも明白ではない⁽⁹⁾。しかし、『ムッシュー・ニコラ』のテキスト自体は、自伝と虚構とが曖昧に混淆する次元を積極的に利用することで、無意識の領域をも含む人間の存在構造をはつきり示しているように思われる。対象の喪失と主体の欠如をめぐる第二節と第三節の論述とおして見えてくるのは、心理学的視線を強めつつ成立した近代の自伝が、そのほとんど成立の時点において、『ムッシュー・ニコラ』とともに心理学的認識を一挙に深化させる様子なのである。

自伝と虚構

虚構作品の源泉、あるいは、自伝の真実性

レチフの出世作となった一七七五年刊行の小説『墮落百姓』には、自伝的素材が数多く用いられている。ここではまず、『ムッシュー・ニコラ』にみられる『墮落百姓』へのリファレンスをおもな材料として、彼のテキストにおける自伝と虚構の関係について基本的論点を再確認しておこう。

レチフの建前はごく常識的である。彼は、唯一無二の現実である実人生の存在を前提として、自身が生きてきたさ

さまざまな体験こそが小説の素材になったのだと説く。『ムッシュー・ニコラ』で彼が語ろうとしたのは「『墮落百姓』の題材をくみ出してきた源泉が何であったのか」(I, 335)ということだったし、小説の「真実の基盤」bases vraies (I, 924)である伝記的事実を示すものはまさしく『ムッシュー・ニコラ』なのである。

この一七七五年の作品(『墮落百姓』と本作『ムッシュー・ニコラ』)とを比較してもらえば、読者には、小説の作られ方、歴史の書かれ方をご理解いただけたと思う。このふたつの著作の題材は同じだが、『墮落百姓』を書いたときには、できごとの記憶はまだ新しくあったし、ほとんどすべての人物はまだ存命中だったから、別人のようにみせかける必要があった。今ではほとんどすべての人々が亡くなっている。〔……〕したがって、私は、今日では歴史家として書かなければならない。(II, 79)

こうしてたとえば、亡くなった父の遺産分与の調整のため一七六七年七月に故郷のサシに戻ったさい、少年時代の農村生活を思っ涙を流したのが、(都市に出てきた農村の若者が墮落する物語である)『墮落百姓』の起源であり(II, 182)、また、ゼフィールに出会う直前のバリでの墮落ぶりは、『墮落百姓兄妹』⁽¹⁰⁾に表現されている通りだとレチフは説く(I, 978)。

『墮落百姓』のとりわけ前半部分には、『ムッシュー・ニコラ』の提示する伝記的事実(と想定しうるもの)や交際のあった人物たちが次々と現れる。オーセール——『墮落百姓』ではAu*と伏せ字にされている——に故郷の農村から出てきた若者はエドモン Edmond という名であり、これはレチフの名ニコラ = エドム Nicolas-Edme を想起させる。レチフもエドモンもパランゴン氏のもとで修行し——ただし、レチフが印刷屋パランゴン(実在の印刷屋フルニ

エがモデル」の徒弟だったのに対して、エドモンは画家パランゴンのもとで絵の修行をする——、パランゴン夫人にあこがれを抱き、やがて、妹ファンシエットとの結婚まで考えてくれた夫人を、慕る思いのあまりに暴行してしまう。すでにオーセール時代から墮落しはじめていたレチフ／エドモンは、移り住んだパリでさらに悪徳に身染め困窮するが、ロワゾーやゴード・ダラスといった親友たち、あるいは彼を愛する有徳な娼婦ゼフィールに助けられて生きていく。彼女は、病気で窮乏し行方知れずになっていたレチフ／エドモンを苦労のすえに見つけ出し、下宿屋のおかみに金をやって食べ物や必要なものを持ってくるように頼んでから言う。「誰でも避けたいわ……そうしたいなら……でもゼフィールだけはだめ！ とても善良な女の子なのよ……」(I, 990)。彼女の言うセリフはどちらのテクストでもほとんど同じである⁽¹¹⁾。

もちろん一般に、虚構作品は事実そのままではない。『墮落百姓』と『ニコラ』のあいだにも軽微な差異を見つげることができる。例えば、アリアドネがテセウスに棄てられた悲しみを歌う詩をレチフが読んで聞かせるのは、『ニコラ』では料理女のエメだが、『墮落百姓兄弟』では——『ニコラ』でエメのあとに料理女になったとされる——ティアンネットである(I, 325-326; 1296-1298)。あるこは、『墮落百姓』で描かれたヨヌヌ川でのエドメとの逢瀬——エドモンもレチフも彼女との結婚を考えていた——は、小説では実際のできごとだが、『ニコラ』ではレチフの見た夢になっていて、この夢が小説の情景の源泉になったのだとされている(I, 477)。虚構化のプロセスのなかで事実はいくらか変更される、というわけである。

『墮落百姓』の人物が複数のモデルを混淆した結果である場合もある。エドモンは、すでに見てきたとおりレチフの分身であるが(I, 963; II, 313)、サシの裕福なラモー家の息子エドモン・ラモーがモデルに想定された⁽¹²⁾。『わが作品』ではさらに複数のモデルが暗示されることがある(II, 913)。『墮落百姓』のエドモンの姓はR*と伏せ

字になっており、Resit と Rameau ともとれるが、『墮落百姓兄妹』では Rameau が明記されている (PP, 215 et note 1)。¹⁾ レチフが自分を小説化するさいにラモー家を意識していたことが分かる。『墮落百姓』に登場するエドモンの妹ユルスユルはと言えば、レチフの妹マリー＝ジュヌヴィエーヴとも (II, 913)、ラモー家のユルスユル・ラモーとも (I, 1049; II, 486)、あるいは両者の混淆ともされている (I, 924; cf. 1490)。一般に、小説のある登場人物が複数のモデルを合成して生み出されることは珍しいことではない。一対一の対応関係は作れないにせよ、実在の人物が存在する事実世界は、やはり虚構世界の源泉として想定されているのである。

自伝に浸食する虚構

しかし、ピエール・テスチュが注解するように、「実のところ、『ムッシュー・ニコラ』は、『墮落百姓』の現実離れた側面をさらに助長するかのような印象をしばしば与える。『ムッシュー・ニコラ』の物語を練り上げるにあたり、レチフは、虚構のうちへとすでに移植されていた自伝的素材を用い、記憶に基づくのと同じくらい、この虚構に移されたものに依拠するのである。」(I, 1301)。「自伝は、それ以前に小説へと投影された作家の自己を、語りのなかにさまざまに取りこむことで「小説化」するものでもある」(I, 1490-1491)。

たとえば、エドモン／レチフがバランゴン夫人にエリー・ド・ボーモンの『ロゼル侯爵の手紙』を読み聞かせる場面。テスチュが指摘するとおり (N, I, 1348; PP, 260, note 1)、²⁾『墮落百姓』の叙述はそっけなく、ティアンネットも同席しているが、『ムッシュー・ニコラ』では夫人とふたりきりであり、足先や膝が触れあったときにレチフが感じた甘美な感覚を述べてきわめて官能的である (I, 446-449)。小説化にあたって省略した要素を自伝で復活したのだとも考えられるが、それではせっかくの官能的場面をわざわざ捨てていた説明がつかない。小説で言及した場面を、

レチフは自伝でさらに発展してみせたのだろう。

『墮落百姓』の世界がそのまま『ニコラ』に導入されることもある。事実が虚構化されるのではなく、虚構の方が事実世界に移植され、「現実化」されるのだ。エドモンが結婚を真剣に考えた相手エドメ・セルヴィニエ Edmée Servigne は、ジルベール・ルジェにしたがえば⁽¹²⁾、本名をマリ・セルヴィニアン Marie Servinien としたが、『墮落百姓』で名付けられたままのかたちで『ニコラ』にも登場している。エドメはレチフ自身の名 Nicolas-Edme の女性形であるから、彼の理想の相手であることを含意している。ここでは自伝が虚構作品を引き継ぐのである (I, 337; 1303)。

ゼフィールもまたきわめて虚構性の高い人物である。レチフが出会ったとされるのと同じ頃、同じ場所 (サン＝ノレ通り) にゼフィールという名の娼婦がいたことは資料から確認されるが⁽¹³⁾、娼婦の名としては珍しいものではなかったともいう。一七七五年に『墮落百姓』ではじめて登場したのは、出会いの時期を扱う自伝的作品『父の呪い』も含めほとんどのテクストにゼフィールが現れていないことから、テスチュは彼女がもともと虚構の人物だったのではないかと考えている (I, 1527-1528)。

バルザックのヴォートランを思わせる⁽¹⁴⁾興味深い存在ゴード・ダラスも、虚構世界から自伝世界へ移り住んだ人物であるようだ。同じくテスチュにしたがうなら、当時の記録文書にはいっさい名前が見られない⁽¹⁵⁾ゴード・ダラスは、オーセール時代の親友で実在の人物と考えられるルイ・ゴード (I, 1334-1335) と、レチフが大きな影響を受けたサシの司祭アントワーヌ・フドリアとを混合してつくられた虚構の人物だと考えられる。レチフは『墮落百姓』の初版と第二版において検閲を配慮し、唯物論者のフランシス会修道士ゴード・ダラスを登場させないように修正を加えた (彼が登場するのは一七八二年の第三版からである)。そのかわりに現れるのが穏和なダラス神父とゴードな

る人物で、これは当初の構想にあった破天荒なゴーデ・ダラスを分割した結果であったという¹⁶。『ニコラ』のある箇所からは、ゴーデ・ダラスは虚構の人物であり、実在したのは彼とは「正反対の性格」のルイ・ゴーデであったと読みとることができる。レチフは注記して、『墮落百姓』とは異なり「露わにされた心」[『ムッシュー・ニコラ』]においては真実だけしか用いてはならないのだ」と書いているが、必ずしも正確ではない (I. 941-942; 1504)。

『ムッシュー・ニコラ』によれば、音信の途絶えていたゴーデ・ダラスは「一七七六年、『墮落百姓』の出版二ヶ月後」にこの小説を読み、レチフを助けるため再会しようとするが、はたせずに病死したという (I. 741-742)。彼はこの破戒僧の新たな逸話を提示して、その存在を本当らしく見せようとしたのであろう。ゴーデ・ダラスは、レチフの婚約者マドロシ亡きあとに、密かに画策して夜な夜な彼に女性をあてがった人物ともされているが、ここまでくると〈意外なことこそが真実である〉といった紋切型の濫用であらう。『墮落百姓兄妹』の中でこれらの事実をわがフランシスコ会修道士に負わせなかったのは、そうしても真理は本当らしくないからである。本書では、礼節を欠くとしても、私は真理を言わなければならないし、真理しか言ってはならないのだ」(I. 576)というレチフの説明は、もちろんそのまま信じるわけにはいかない。レチフはむしろ反対に、『ニコラ』のゴーデ・ダラスの存在感を高めるために『墮落百姓』を大いに利用するのである。彼はわざわざ、「読者よ、このフランシスコ会修道士をご存じだろう。『墮落百姓兄妹』でお馴染みである」と記し、ゴーデ・ダラスの真の姿を見出すべく、小説の方へと読者を誘う (I. 395)。そして『墮落百姓兄妹』で展開されるゴーデ・ダラスの唯物論的思想は、あたかも実在の人物の思想であるかのように、『ニコラ』から参照されることになるのである (I. 543; 567)。

挿絵の参照

『ムッシュ・ニコラ』にはしばしば、『墮落百姓兄妹』の版画への参照指示が付されている。レチフはたとえば、パランゴン夫人の容貌を読者にイメージさせ、夫人からの親密な口づけや、大胆な接近の情景、そして暴行の決定的な場面を喚起するために⁽¹⁷⁾、あるいは病気で困窮しているところをゼフィールに見出されて助けられる場面を喚起するために⁽¹⁸⁾、小説の版画を利用する。彼は、あたかも小説の挿絵として描かれた情景が事実そのままであったかのように振る舞うのだが、より逸話的な光景になると、事実と虚構の境界はさらに曖昧になる。『ムッシュ・ニコラ』が小説世界の逸話を引き継ぎ、小説が自伝を浸食するかのように思われてくるのである。以下では、版画への参照指示が付された、グルネル通りの女を愛人としていた僧侶のくだり⁽¹⁹⁾、テレーズとの情事⁽²⁰⁾、少女スイイをめぐる近衛騎兵との騒動⁽²¹⁾について見ておこう。

レチフは『墮落百姓兄妹』で合成した逸話 (PP. 608-610) を「起いったとおりのかたちで別々に語らなければならぬ」(I 963) と述べて、こゝでも事実の虚構化という常識的な構えをとってみせる。彼は、街で目をつけた女性の跡をつけ、夜、グルネル通り (現在のジャン・ジャック・ルソー通り) の家の階段で待ち伏せし、蠟燭の灯が風で消えたのを幸いに、恋人になりすまして相手と関係を持つ。『墮落百姓』ではなりすまされた愛人が神父だけだったのに対して、『ニコラ』ではふたつに分割され、若い色男と神父のふたりの場合が提示されている⁽²²⁾。

テレーズは、『墮落百姓』の設定によれば、エドモンが言い寄っていたエクリューズ嬢と同じ建物の二階に住んでいたクルビュイッソン夫人の女中であつた。エドモンは浮薄なテレーズとすぐに親しくなる。版画は窓辺にいるテレーズの背後からエドモンが近づく場面を描く。次の一節はその後の顛末である。

テレーズはひとりきりで、扉は半分ほど開けたままになっていた。ぼくはこっそりと入りこみ、かがんでいたテ

レーズを掴まえ、激しく愛撫した。「まあ！ 誰か来たらどうするの！……奥様が……」彼女は中庭に面した窓のところへ行った。おしゃべりな隣の女が彼女に気づいて話しかけてきた。手持ちぶさたになった彼女は、悪魔にそそのかされ、このうえなく綺麗な脚を見て夢中になった。ぼくは窓のカーテンをお転婆のお尻のうえまできりあげ、そして……。彼女は何も言わない。大胆になった僕は美の花壇の最も魅惑的な花を摘んだ……。レーズはたえず話しつづけていた。すくなくとも舌の先ではね。というのも、自分では何をしゃべっているかわからなかったのだ。それに言葉もとぎれとぎれになったから、彼女がぼくのいたずらにどれほど氣をとられているか一度ならず分かったのだ……。 (PP, 616)

『ニコラ』のレーズは、一七五七年、梅毒を患ったレチフを介抱してくれた女性として登場する。浮薄な彼女はレチフを誘うのだが、病気の彼は答えることができない。彼はそれを詩にして伝えた。快復後に彼女ともった関係は、引用した『墮落百姓』の一節と同じように描かれているが、『ニコラ』はレーズの介抱について詳しく記して、彼女との放蕩を彼の人生のなかに位置づけてみせる (I, 1101-1104)。小説の逸話に前後をつけ加えより詳細に語ること、断片的物語を文脈化し、その真実性を高めようとするのである。

スイイは娼館にいた幼い処女だった。この話には前史があり、エドモン／レチフが、知り合いの娼婦オロールの紹介で、老人たちの慰みの相手をしている少女バチルドの初穂を摘んだことがまず語られる (PP, 577; N, II, 20-21)。その数年後、いかさま賭博で将校たちから金をまきあげたエドモンは、彼らから疑惑をつきつけられたため、決闘をしてそのうちのふたりを傷つけるが、同じ日、娼館ラ・デュボンでバチルドに紹介されて幼い処女サイイに出会う。おりから来合わせた客は、エドモンが金を巻き上げた近衛騎兵たちだった。彼らに自分の処女を奪われると知ったサ

イイが、むしろ好みのエドモンにそうしてほしいと頼むので、彼は応じる。しかしその後、ベッドの下に隠れていたエドモンは、犬に吠えられたために見つかってしまう。怒った近衛騎兵たちは彼を毛布に乘せて宙に舞わせ、おりを見て落として殺してしまおうと考えるが、女たちが毛布の端をちゃんともつていてくれたおかげで彼は難を逃れる(版画の場面)。やがて食事になり、デザートが運ばれたときに、サイイは遊びのようにして突然テーブルをひっくり返し、そのすきにエドモンを逃がす。深夜、彼は近衛騎兵のひとりをつけて決闘に及び、相手の剣を奪い取る勇気を示した(PF. 595-599)。

『ニコラ』でも基本的には同様の逸話が語られているが(II. 21-25)、もちろんいくつかの違いもある。『ニコラ』ではレチフがバチルドの手引きでサイイとすでに試みているところに、たまたまラ・デュボンが近衛騎兵たちを客として連れてきたというかたちで話が始まるし、『墮落百姓』では騎兵たちはサイイの処女喪失を状況から察知したのに対して、『ニコラ』では年上の娼婦バチルドがすべてを説明してしまう。結末でエドモンが決闘する件は『ニコラ』にはなく、むしろサイイが騎兵たちに向かい、彼らがレチフを殺したりしないようにするために大騒動を起こしたのだと説明すると、その場はなんとか穏便におさまってしまう。これとは逆に、テーブルをひっくり返す前に、サイイは騎兵たちを刺し殺してしまおうと合図をしているから、『ニコラ』の方が激越な箇所もある。

要するに、小説で語られたひとつの逸話をふたつの「事実」に分解してみせたり、断片的逸話をより大きな文脈に位置づけたりしてみても、レチフが提示する「実人生」の世界は、それ自体がすでにきわめてロマネスクであり虚構的である。サイイの逸話の書き換えから読み取れるのは、この作家において実人生と虚構世界はほとんど同じレベルにあるということである。いやむしろ自伝の方が、物語世界のさまざまなヴァリアントのひとつになってしまうのである。

自伝の方が虚構化の度合いが甚だしい場合として、最後にアデライード・コラルの逸話を挙げておこう。『墮落百姓』のアデライードは、恋人の薬剤師としばしば散歩しているところをエドモンに目をつけられる。彼はこの恋人の男と知りあいになり、自分の出す恋文だと偽って、煙突掃除夫に化けて訪ねていくという手紙を書かせ、それを恋人からのものだと言ってアデライードに渡す。彼女は恋人の筆跡なので騙され、煙突掃除夫に化けたエドモンと気づかずに関係を持ってしまう (PP. 585-587)。この「わが」は、『ムッシュ・ニコラ』の一部をなす『わが暦』では一七七九年のこととして記されている。こいでもアデライードが恋人の医学生と散歩している姿にレチフは目をつけるのだが、レチフはふたりの秘密のつきあいをむしろ母親に暴露しに行くのである。すると、この母はかつてのネカール嬢で、アデライードはレチフの娘だったことが分かる。恋人とのつきあいを禁止されたアデライードは彼とともにカイエンヌに行くが、やがて一七九一年、レチフは、結婚相手を世話するというアデライードの手紙に応じて——自分の娘であることが判明した——パレロワイヤルの娼婦たちをカイエンヌに送り出す。娘たちに囲まれていたレチフはこうしてふたたび孤独になる (I. 437-439; 827-831)。

よく知られているとおり、『ムッシュ・ニコラ』では、レチフの「家父長的願望」を反映して、いたるところでレチフの娘たちが発見される。彼は、かつて関係のあった女性はみな自分の娘を生んだと妄想するのである。ある箇所では二十人ほどの子供が挙げられているが (I. 751-752)——もっとも、その数は年を経る毎に増えていく——、この一覧からも分かるとおり、レチフが関係をもち娘まで生ませたゼフィール自身が、じつは彼の娘だった。『ムッシュ・ニコラ』は到底事実とは思えぬ逸話を数多く含んでいる。パランゴン氏が夫人ともうけた五人の子供はみな別の女性との子であって (I. 943-944⁽²³⁾)、夫人はレチフに暴行されたときいまだ処女であり (I. 427)、やがてレチフの娘エドメ＝コレットを出産したとさえされる。こうした部分においては、『ムッシュ・ニコラ』はもはや事実に基

づく自伝ではなく、レチフ自身の欲望の文学的表現となるのである。

条件法における自伝

レチフにとって『ムッシュー・ニコラ』が自伝的試みであったことはまちがいないが、そこで描かれる「私」は、彼が生きた事実世界の「私」だけではなく、彼が抱いたさまざまな妄想や可能性をも含んだ「私」だった。

レチフは自己の体験や見聞から小説世界を紡ぎ出す能力を自慢して、次のように書いている。

私は偉大な寓話作者なのである。動物に對話をさせるかわりに、私は自分自身を取り上げる。私はひとりで多種多様な動物なのだ。ときには狐のように狡猾であり、ときにはロバやアクリイのように愚鈍でのろまで馬鹿である。より多くの場合には、ライオンのように誇り高く勇気があり、ときには狼のように逃げ足が速く卑劣であり、鷲やハゲタカであったり、たんなるハイタカであったりするが、多くの場合は、引き裂かれた山鶉や雲雀である。私はこうしたすべての形態をとって姿を現す。私は、寓話の主人公であり、こうした動物の役をそれぞれ演じるのだ……。 (II. 313)

このような変身は、現実のレベルだけではなく、条件法で示されるような非現実のフィクションにおいても展開される。次の一節ではいかにして現実から虚構を生み出されるのかが語られている。

私は、自分がしたかもしれない振る舞いにしたがって書いたのである。私は、自分が彼女〔ヴィクトワール・ロ

ンドー」を愛し、崇め、大切にしようように、彼女を「主人公に」愛させ、崇めさせ、大切にさせたのである。私は、彼女の情事についてはまったく知ることがなかった。そんなものがなぜ必要だろう？ 私を作ったのは、この美しい娘の物語ではなく、私が彼女とともに生きたならうつとりしたにちがいない物語なのである。(II, 316)

『新アベラール』第一巻に収められた「夫たちの哲学」が描くデュピルとジュリーの交渉は、こうしてヴィクトワールをめぐるレチフの妄想から生まれたとされる。すでに見てきたように、『ムツシュー・ニコラ』は多くの虚構的逸話を含むテクストであるから、以上の議論をそのままレチフの自伝テクストにあてはめることも可能であろう。『ムツシュー・ニコラ』は、実際の生の軌跡だけではなく、レチフが生きたかもしれないさまざまな逸話をも内包したテクストであり、それは彼の生の諸可能性を包含しているという点で、事実のみを記した狭義の自伝よりも、いつそう「自伝」と呼ぶにふさわしいとさえ言えるかもしれない。それは、複数の「可能的な私」を描く「条件法」における自伝、より正確に言うなら、「条件法の世界をも直説法で描く自伝」なのである。

事実世界における分身と反復

『ムツシュー・ニコラ』がこのように欲望の言語的定着の場であるとすれば、それが一種の反復強迫に貫かれていたとしても不思議ではない。執拗に反復される物語については次節以降で詳しく見ていくことにして、ここでは最後に、自伝の虚構化のはてに、事実世界においてさえあたかも人物が反復され分身するように語られている一節をとりあげてみよう。

一七八七年刊行の『墮落百姓兄妹』の末尾には、ピエール・ラモーが、弟エドモンと妹ユルスユルの不幸——それが実際にどのようなものだったのかは明らかにされない (cf. I, 1183) ——を嘆いて作ったとされる哀歌が掲載されている。一七五八年、ゼフィールが危篤に陥ったときにレチフはこれを歌っているが、この哀歌にはエドモンとユルスユルを救うゼフィールなる女性が登場する。そこから一七五八年のレチフは、「ゼフィールの母はどうして彼女にゼフィールと名付けたのだろうか？ この哀歌を、ユルスユルの話を知っていたのだろうか？」と考える (I, 1149-1150)。こうした一節は読者に眩暈を与える。

『ムッシュー・ニコラ』の多分に妄想的な記述にしたがうなら、一七三九年、五歳の頃、レチフは遊びのつもりでユルスユル・ラモー——彼女の年齢ははっきりしない——にいたずらをしてしまい、ラモー夫人からいらまれており (I, 33)、他方で、ゼフィールは、じつを言えば、一七四四年か一七四五年に少年レチフ（ほぼ十歳！）が刈り取り女ナネットと関係をもったことから生まれた娘であるとされる (I, 54-55; 1011; 1059)。つまり、ユルスユル・ラモーの不幸はおそらく一七三九年から一七四六年頃までのあいだに起きたことだと考えられる。ナネットは、ピエールの哀歌を含めて事情を知っており、それを踏まえて自分の娘をゼフィールと名付けたかもしれない。一七五八年の『ニコラ』のレチフは推論を再構成すればこのようになるだろう。

しかし、『ニコラ』でも (I, 980)、『墮落百姓』でも (pp. 570)、ゼフィールは一七五七年にレチフ／エドモンが出会った女性であり、これ以外にゼフィールという名の女性は登場しない。素直に読むならば、『ニコラ』の描くゼフィールが『墮落百姓』の小説世界に転位されたということになり、一七三九年から四六年のあいだに別のゼフィールがいたとは考えにくい。しかし、先ほどの一節によれば、この別のゼフィールは、『ニコラ』のゼフィールがレチフを助けたのと同様、この先立つ時期にエドモン・ラモーを助け、ナネットが娘を名付ける参考にした人物だという。

たしかに『ニコラ』や『墮落百姓』が語る一七五七年のゼフィールが、ふたりの実在モデルを合成して作られたのだと考えることもまったく不可能ではない。が、テキストから受ける印象はむしろ次のようなものだ。つまり、ゼフィールの物語が、事実世界のふたつの時期に投影されてしまったため、あたかも実際にふたりの人物がいるかのように思われてしまうのである。名を同じくし、同じような振る舞いをする異なるふたりの女性が事実世界に反復的に出現することは、常識的には理解しがたい。読者は、いわば生身のゼフィールが分身しているような印象を受け、その結果、事実世界自体が虚構化されてしまったかのような眩暈に陥る。レチフは、事実世界へと参照を行いつつも、同じ身振りで、語りの前提となっていた事実と虚構との区別を曖昧にしてしまうのである。

レチフは自分について数々の逸話を提示して饒舌に語っている。しかし、にもかかわらず、あるいは、それゆえに、彼の正体は捉えがたい。彼は読者の前でさまざまに変身してみせるが、「本当の」姿はいつまでも分からない。しかし、『ムッシュー・ニコラ』に事実と虚構を区別できない曖昧な領域が多く存在するとしても、テスチュをはじめとして研究者が伝記的叙述をする場合には、やはり『ムッシュー・ニコラ』を参照せざるをえない。明らかな虚構部分を含みつつも、これはレチフの生についての一次資料なのである。こうした両義性は、読者を一種のダブル・バインドに陥れる。レチフがテキストに姿を現せば現すほど、「本当の」姿はほやけ、饒舌に書かれたものの背後にレチフの主体は逃れ去っていくのに、『ムッシュー・ニコラ』にはやはり一定の「真実性」があり、読者はこれをたんなる虚構と割り切ることができない。主体の真理が見えるはずの場所に真理が見えず、たえず蟹気楼に遭遇するほかはない読者は、しかし真理があるはずだという意識を捨てることができない。

テスチュの読みによるなら、レチフが飽くことなく書き続けたのは、自己の存在のけなさと死や忘却に抗して、

自己を書かれたものとして定着し永続させるためだった²⁴。彼にとって書く営為は、不幸ではかない生をエクリチュールにして何度もくり返すことで幸福と充足感をえる行為であった²⁵。しかし裏返して言うなら、これは彼が深い喪失感を抱いていたことを示している。ここまで見てきた露出過多の自伝的エクリチュールは、おそらくは主体の欠如に対する想像的代償行為なのである。次節からはこの欠如がどのように描かれるのかを見ていきたい。

不可能な対象

ジャネット・ルソーとバランゴン夫人

『ムツシユー・ニコラ』にしたがうなら、レチフの人生は娼婦を含む数多くの女性との関係によって彩られていた。しかし、こうした一見軽薄な交遊の連続に見えるものも、じつは根本的な愛情経験によって貫かれていたという。ルソーにとってのヴァランス夫人にも比すべきバランゴン夫人と、クールジの少女ジャネット・ルソーのふたりこそ、絶対的な理想の女性だったのだとレチフは主張するのである。

一七四八年から一七五〇年にかけてレチフは、故郷のサシにほど近いクールジの司祭であった長兄エドム＝ニコラのもとで寄宿生活を送ることになった。公証人の娘ジャネット・ルソーを見て、理想の人であると確信したのは、その最初の年の復活祭でのことである。出会いの場面は次のように描かれている。

私は三ヶ月半ほど前からクールジにおり、復活祭を迎える頃となった。〔……〕復活祭の日、私の魂は儀式の

偉大さのために高揚していた。「……」ついに聖体拝領のときになり、男たちがさがると、女たち、そして若い娘たちが前に出る。そのなかに私のまだ見たことのない娘がひとりいて、他の娘たちの姿をみなかき消してしまつた。彼女は、慎ましく、美人で、背が高かつた。初々しい様子で、顔は白かつたから、恥ずかしさに頬を染めたならいっそう目立ち、純潔がより際だつたことだろう。水の精を思わせる体つきで、服の趣味もまわりの娘たちに優っており、とくに、私が抵抗できないあの全能の魅力、きれいな足の持ち主だつた。物腰、美貌、趣味、装い、初々しい肌の色、すべては、私の想像力が夢に見た素晴らしい姿を現実のものとして描き出していた……。「この娘だ！　いた！」私は大きな声で言つた。あまりにも強烈にそう思つたので、声になつてしまつたのだ。

私の注意、心、魂、思考、欲望は、そのすべてが彼女の虜になつた。もう彼女しか見えなかつた……。私は彼女の名前を知らなかつた。ミサが終わり、外へ出ると、美しい天使は私の二三歩前を歩いてゐた。「家政婦の」マルグリット・パリスが彼女に近づいて「こんにちは、ルソーさん！」と呼びかけ、接吻して言つた。「ジャンネット、あなたは心も体も天使のようね。」「……」

同志である読者よ！　このジャンネット・ルソー、この天使が、自分ではそうと知らずして、私の運命を決めてしまつたのだ。「……」私は真正正銘の愛を感じた。この愛のおかげで、私は自分自身を越えたところまで成長し、勇氣ある者と見なされるようになった！　私は一生懸命努力を重ね、嫌悪感をこらえ、あらゆる障害を克服したが、それは、ジャンネット・ルソーが私の胸のうちに不滅の愛を生じさせたからであつた！　私はジャンネットを得ることができなかつたし、彼女に話す機会もついに持たなかつたが、彼女にふさわしい存在となるためにあらゆることをした。勇氣をふるつてあえて彼女の消息を尋ねることもできぬまま、四十六年間会わずに過した六十歳の今日でも、彼女の名前を思うと身が震える。(I, 195-196)

レチフは結局、ジャネットとは一言口を交わしただけであった。その日は彼にとり「いつまでも記念すべき日」となる (I. 284)。

パランゴン夫人となるコレット (本名マルグリット・コレ) にレチフが初めて会ってやさしく撫でてもらったのは一七三九年、五歳のときである (I. 35-36)。一七五一年、この最初の出会いと同じヴェルマントンで、レチフは、オーセールの印刷業者パランゴン (フルニエ) に紹介され、徒弟になることを認められるが、このとき夫人とも再会をはたした。そのときの印象を彼は次のように書いている。

パランゴン夫人に会ったとき、私は、ジャネットに抱いたあらゆる感情を夫人に対しても感じた。ただし、ジャネットは欲望を引き起こさなかったが、パランゴン夫人は私に欲望を感じさせた。私は彼女のもとへ心が飛んでいくのを感じた。彼女の家で彼女の指図のもとと生活することは幸福そのものであるように思われた。彼女は私を眺めた。その美しい視線が私にそそがれると、私自身が高貴になるように思われた。神よ！ なんといい厳かで善良な姿であらう！ (I. 296)

複数の愛人、唯一の女性

ジャネット・ルソーとパランゴン夫人は、レチフが数多くの愛人たちの根源に位置づけた女性である。引用した一節でも述べられているとおり、レチフはこのふたりに対してほとんど同じ感情を抱いたが、ひとつだけ違いがあった。ジャネットは「女神」さながらに、肉体的欲望なしに崇められ、彼女がレチフに抱かせる気持ちは、激しくはあれ純

粹な「優しさ」だけである (1, 197-198; 205; 208-209; 213)。「女神」というのでは正確ではない。レチフはさらにつけ加えて言う。ジャネットは「彼」自身の存在を補完するもの」なのである (220)。

ジャネットの精神性を強調する文脈では、レチフはパランゴン夫人よりジャネットの方が自分にとって根源的な存在であると主張する。夫人の美しさはジャネットのイメージに基づいて感じられる (1, 205)。「ジャネットは「レチフ」の心の奥底を占有しており、「彼」は心の底からほかの誰かを愛することができなくなっていた」。これに対して、「パランゴン夫人は、「レチフ」の五感、熱狂、趣味、虚栄心、感謝、徳、誠実さ、あらゆる長所、あらゆる情熱を奪い取って」おり、「ときに激しい欲望の嵐を荒々しく掻き立て、ときに彼女の徳に対する尊敬の念で「彼の心を」いっぱいにした」。夫人への愛情は、より具体的な感覚や感情からなっており、ジャネットへの精神的な愛とは異なるものだとなる。こうしてレチフは、パランゴン夫人のみならず、彼が愛した数々の女性たちの背後にジャネットを見る。彼女は「美の典型」であり、複数の女性のうちに彼が愛した唯一の女性だったというのである。

マドロン「レチフは彼女と結婚しようとするが彼女は死んでしまう」は、顔立ちよりも、上流夫人らしい服装がちょっとパランゴン夫人に似ているので、私を魅惑していた……。エドメは、慎ましさ、体つき、物腰、服装が、ジャネットの生き写しだったために、私を魅了していた。私が彼女のうちに賞賛していたのはジャネットだった。パランゴン夫人でさえ、その美しさの種類から言えば、エドメよりはるかにジャネットに似ていた。同じ肌色で同じ微笑を浮かべていたのだ。同じように装ったら、姉妹と間違われたことだろう。コレット「パランゴン夫人」と若いエドメは私をきわめて切実にジャネットに結びつけたので、私は二人を愛しているあいだ、麗しい「ジャネット・」ルソーの思い出にたえず心が震えるのを感じ、ときに（そして最近にいたるまで）彼女との幸

福な結婚の幻想に耽ったものである。一言で言えば、「パランゴン夫人やエドメを愛するようになって」私は彼女ひとりを愛していたときと同じくらい彼女を愛していた。彼女は私にとって美の典型 [le type de la beauté] であった。私がここで言っていることは、一見そう思われるほど稀でも異常なことでもない！ 私と同じくらい注意深く自分の内心に分け入ってみれば、どれほど多くの男性が、たとえ複数の女性を追い求め、得たとしても、自分はただひとりの女性だけを愛していたのだと気づくことだろう！ 最初に愛した女性に対する好み、この女性の美の種類こそが、どんな場合であれ、他の女性を愛すべき存在にするのである。(I. 462-463)

しかし、レチフ文学にあつては、起源と見えたものはすぐに逃れ去っていく。「パランゴン」は活字のポイントを示すとともに「典型」をも意味する (I. 132)。パランゴン夫人は、その名のとおり、レチフにとってやはり「美の典型」なのである。衝動的に犯してしまった夫人にレチフが語りかける次の箇所では、ジャネットが愛の対象の「原型」であつたことはもはや問題にされない。

ああ！「あなたを」愛している、欲望していると思つた私は間違つていました！……あらゆる女性のなかに私はあなたのイメージだけを見ているのです！あの天上のもののようないメージを、私は女性たちのうちに見て崇めていたのです！……「……」私は、あなたを知る以前からあなたを崇めていました。あなたは私にとって美の原型 [le prototype de la beauté] でした。そうです、私が愛らしいと思って眺めたものすべてにおいて私が崇めていたのはあなたなのです。最初にあなたを見たとき、私の心は私にこう言いました。「ほら彼女だ！お前の探している女性がいるぞ。ほら彼女だ。崇めろ……」(I. 583)

ジャネットがレチフの「存在を補完するもの」とされていたのにも似て、パランゴン夫人は同じ箇所でレチフの「半身」とされ、レチフも夫人の「半身」であるとされている⁽²⁶⁾。夫人の陵辱後に、レチフが彼女の精神性（「天上のもの」のようなイメージ）を強調するようになったのは示唆的である。次の一節ではジャネット／パランゴン夫人の関係が身体／魂の関係になぞらえられているが、ここまでくると当初あれほど強調されていたジャネットの精神性と夫人の官能性の対比は完全に消えてしまう。

くり返すが、私は生涯でただひとりの女性、情愛の深いただひとつの魂に対して、ただひとつの情熱を抱いただけなのである。私はジャネットがそのような女性だと信じた。私が彼女を崇めたのは、私がパランゴン夫人のうちに実際に見出したような魂を彼女が持っていると考えたからである……。ジャネットを見て私はこう独語した。「ほら、私の想像力の妄想がついに現実になって現れた……」コレットの話すのを聞いて私は思った。「もし私に想像するに十分な美質と徳性があつたなら、こんな感情をジャネットのうちに想定していたはずだ。」「……」私が「数々の女性のうちに」愛したものは、パランゴン夫人の種々のイメージなのであった。パランゴン夫人とは、私がジャネットの身体にあてはめた魂だった。ジャネットの魂について私は何も知らなかったからである。しかし、ひとりの女性を作るためには魂と身体、肉体と精神が必要である。私はジャネットとコレットのうちにただひとりの女性のみを愛していたのである。(I. 630)

ジャネットとは結局ひとこと言葉を交わしただけの関係なのだから、彼女がいかなる内面をもっていたのかレチフに

は分らない。そこで彼は、ジャネットの身体のうちに夫人の有徳な魂を想定する。しかし、「私はジャネットとコレットのうちにただひとりの女性のみを愛していたのである」と言われるとき、夫人、あるいはジャネットは、もはや「原型」ではなくなり、むしろ彼女たち自身が、ある「唯一の女性」のふたつの現れとでもいったものになってしまう。レチフのテクストを読み進めていっても、この「唯一の女性」が実在人物として現れることはない。それは、ジャネットでもパランゴン夫人でもなく、事実世界には存在しないものとして視界から逃れ去っていく。

原型の喪失と女性の置換

「唯一の女性」は、数々の実在の女性の背後に明滅し、捉えがたく逃れ去ることで、主体の欲望を惹起させる。喪失された「原型」は主体の視線を惹きつけるが、主体はそれをふたたび所有することができないし、到達できないからこそ主体は対象を欲望する。レチフはこのことを、たとえば神学的な思想の装いで次のように述べている。

恒常性もし変わることがないなら単調なものとなる。所有された財に対しては欲望は消えてしまう。到達できない財に対して欲望は燃え立つのだ……。人間は〈神〉から離れ出て、生まれるやいなや〈神〉にふたたび合一しようとする。ここから人間は不安になり、幸福を空しく追い求め、〈自然〉や〈神性〉について常軌を逸し矛盾した考えを作るのだ。〈自然〉や〈神性〉の単一だが崇高な理念は人間には捉えることができないから。〈完全〉から離れ出た人間は自分を不完全だと感じる。彼は〈完全〉と〈幸福〉を探し求める。人間は結局、それらを死においてふたたび見出すのだ……。 (I, 565)

しかし、より興味深いのは、喪失された「原型」が欲望を生むという、ほとんど精神分析的とも呼べる欲望生成の論理が具体的実例によって展開されていることである。パランゴン夫人は、暴行の一件後、オーセールにやって来ていた妹ファンシエットをレチフと婚約させ、その印に時計を交換させる（U 63+637）。レチフは幸福を感じるが、彼が本当に望む相手はパランゴン夫人である。ファンシエットのみならず、当時つきあっていた他の少女たちも含めて、女性たちはレチフにとって所有しえぬパランゴン夫人（コレット）の代理表象にほかならなかった。

おお、コレット！ 私はあなたしか愛してはいなかった！ コレットは私の心と五感を所有していた！ 私はファンシエットを彼女の代わりにしよう [lui substituer Fanchette] と努力したが、この若き女性では私の心を満たすことはできず、私の心にはひとつの空虚が残った。私はこれを、私に愛らしく思われたあらゆるもので埋めたのである！ 私はコレットを愛するのをやめようと望んでいたが、私の魂と同一のものとなった彼女の魂は私の固有の本質だった。私は自分自身から離れられないのと同様、彼女からも離れることができなかった。他のあらゆる女性性は、コレットのイメージが映る鏡にすぎなかった。そして私は、欺かれた雲雀のようにそれに熱中しはじめ、囚われたあとでやっと自分の過ちを悟るのだった。私が若い娘たちのそばで感動するとき、私を興奮させているのはコレットだった。そして私はといえば、彼女の美のこうした空しい模造品のせいで自分は優しい気持ちになっているのだと信じていたのだ。（U 673-674）

ここでの鏡像の比喩は示唆的である。鏡像は欲望の対象のイメージを与えてくれるだけで、現実の存在を決してまたらしてはくれない。

先ほどの箇所ではバランゴン夫人ともジャネットとも異なる「唯一の女性」が到達不可能な対象として仮構されていたが、ここでは夫人がそうした位置に置かれている。一見すれば矛盾しているが、「原型」の消失と、その無数の鏡像の散乱、とも呼ぶべきロジックからすれば、こうした相違は些細なものにすぎない。どのような名で呼ばれようと、レチフは、ある究極的な「原型」を見せ消ししながら、その無数の反映をテキストのうえに散乱させる。原型は姿を隠す一方で、自分の分身を次々に生み出す。そのため、レチフのテキストには無数の愛人が登場し、彼女たちは次々に「置換」されていくのである。

テスチュはブレイヤッド版の註で次のように述べている。「エドメ・セルヴィニエがコレット・パランゴンの中に見出され (I, 756)、エミリー・ラロージュがゼフィールの中に見出され (I, 674)、アンリエット・キルシェがゼフィールの中に見出され (I, 1081)、コレット・パランゴンがローズ・ブルジョア (II, 150) の中に見出される、等々。

「……」読者に対して「自分の」道徳的な復権を試みようという配慮は否定できないが、こうした執拗さのうちには、散逸と不連続性から自分の愛情生活を引き離そうとする欲望をも見るべきである。恒常的なものを引き出すことは逃れ行くものを支配することなのである「……」(I, 1304) 多くの女性と浮き名を流しても、自分はただひとりの女性を愛していたのだ、という道徳的弁明と、すべてが過ぎ去っていく此岸世界において変わらぬ存在を得たい、という実存的欲求とを読みとるテスチュの読解は正確である。しかし、女性の「置換」に関してレチフのテキストが示しているのはこれだけではない。「置換」は、無意識の構造が生み出す運動にも由来するように思われる。レチフの特殊性は、この運動を虚構を通して増幅させ露わにしてみせたことである。以下では、ゼフィールを起点にして、この問題を考えてみよう。

すでに見たように、ゼフィールは、おそらく実体験の核に大幅に肉付けすることでレチフが創作した「有徳な娼

婦」である。パラゴン氏のもとでの徒弟修行を終えてパリに出たレチフは、一七五七年後半、娼館にいた彼女に出会い、ファンシエットに対するのと同じ優しい敬愛の情を抱いたという (I. 979-980)。年末、病氣から貧窮したレチフは、ゼフィールによって探し出され手厚い介抱を受けた。彼女に自分の子を宿したと伝えられたレチフは徳性を回復した気持ちになり、回復後は仕事にも身を入れるようになる。ゼフィールに対する「燃えるような情熱」はジャンネット・ルソーや、とりわけパラゴン夫人が彼に感じさせたのと同じものだったという (I. 987)。翌五八年四月、彼女は娘ゼフィレットを出産。レチフは友人のロワゾーやその恋人ゾエにも囲まれ、幸せなひとときを過ごす、ゼフィールは年末に突然亡くなってしまふ。

レチフにとって、ゼフィールは亡くなったパラゴン夫人の代わりであり、しかもはや誰もその代わりになることができぬ「置換の最終項」であった。

ゼフィールはすべての代わりとなっていた。しかし誰も彼女の代わりになることはな。 (I. 1049)

ゼフィールが亡くなったとき、レチフは次のように叫ぶ。「私はパラゴン夫人を完全に失ってしまったのだ!……」 (I. 1052) だが、ゼフィールは遺言で、自分の代わりとして友人のスュアデルをレチフの婚約者に指定し (I. 1076-1077)、レチフも前言を翻し、スュアデルを喜んで受け入れている。

われわれのパーティーでは、スュアデルは私のゼフィールであり、彼女はゼフィールと名乗ることを喜んでいて。彼女の美しさはゼフィールのものとは違ったが、同じくらい美しかった。 (I. 1076)

スエアデルはやがて狂犬に咬まれて死ぬ。テクストの論理にしたがうなら、彼女の死によって、レチフはゼフィールを「もう一度失った」ことになる (T. 1077)。この置換のプロセスは、さらに新たな恋人としてイギリス人アンリエット・キルシエが現れることで念入りに強調されている。

私は彼女〔アンリエット・キルシエ〕のうちにもうひとりのゼフィール、私たちを結びつける血縁〔父娘関係〕を知る前に私が愛していたようなゼフィールを見出したように思った。あるいはむしろもうひとりのスエアデルかもしれない……。 (T. 1081)

置換の幻想は恋人や妻に対してだけでなく娘にも向かう。後に見るように、レチフはクルジ滞在時代に家政婦マルグリット・パリスと関係を持ち、彼女はひそかに娘エレオノールを生んでいた。一七五七年四月、パランゴン夫人を失ったシヨックのために衰弱していたレチフを慰めてくれたのはこのエレオノールだった。救いの手をさしのべる娘エレオノールの姿はゼフィールと重ねあわされる。一七五九年、ふとしたことからエレオノールがゾエのもとで絵を教わっていると知ったレチフは次のような感想をもらす。

私は思いに沈み、沈黙を守っていた。しかし、甘美な喜びにつき動かされて、私の悲嘆に暮れた心はふたたび生氣を帯びるようになった。かつて「パランゴン夫人を失って憔悴していた」私はエレオノールを可愛がったが、それは大人と子供の差を別にすれば、ゼフィール自身に対するのと同じほどの愛情であった。そして私の賞賛の

念、私の優しい気持ちひき起こされたのは、彼女がゼフィールと同じように私の命を救ってくれたからである……。「……」エレオノールとゼフィールは知りあいだった、彼女たちは一緒に生活していた！ ふたりの姉妹は愛しあっていた！…… おお、私の親愛なる娘たちよ！ こうした事情はお前たちを私にとってより一層親愛な存在にしてくれる！…… エレオノールはやがて私にゼフィールを返してくれることだろう！…… いつの日か彼女はゼフィレット「レチフとゼフィールの娘」に対しては母の役目をしてくれるだろうし、ゼフィレットは私の年長の娘「ゼフィール」の代わりになってくれるだろう！ 私たち三人はいつか一緒になり、おそらく、……まだ私には予感しかできないが……他の者たちも一緒になるだろう。私は家族……多人数の……家族をもつことだろう！…… それは私の愛してきたものすべて……私の愛したものすべて……私の失ったものすべてを私に返してくれることだろう！……」(I, 1067-1068)

すでに見たように、ゼフィールはじつはレチフの娘であり、年齢順にエレオノール（およそ十歳）、幼いゼフィレットがつづく。エレオノールが妹ゼフィレットにとつての母となり、さらに、ゼフィレットが成長しレチフにとつてゼフィールのような存在——すなわち、妻——になると妄想するとき、女性たちは、家族構造の「本来的な」枠組みを曖昧しながら、娘と妻と母の役割を自由に取り替え、たがいに置換可能な等価物と化していく。自分の娘たちを妻とし、そこから生まれる娘たちをも含めた大家族に囲まれて幸せに暮らすことを夢見る、よく知られたレチフの近親相姦的妄想は、こうした女性の置換可能性と関連している。

ナルシシズム

いうまでもなく、ここで問題になる「女性」は生身の人間ではなく、レチフの妄想世界を構成する「項」にすぎない。实在の女性が問題になっている場合であれ、その存在はすでに妄想の場の力学のうちに絡めとられている。無意識に通底するこの心的世界に注がれるレチフの視線は意外にも正確である。『ムッシュ・ニコラ』を「人間の心の動機」仕組み」resorts du cœur humainについての探究とする心理学的な構えは、こうした文脈で見れば、語りの建前ないし口実であるどころか、大まじめに受け止めるべき宣言であるとすら思われてくるだろう。

私が激しい情熱を抱くようになるのは、まさに女性への想い出によって、切実にほろりとした直後なのである。その想い出は、ジャネット・ルソーか、コレットか、マドロンか、マリアンヌ・タンジか、妹のようなドウマイイか、あるいは最後になるが、誰とも比べえぬゼフィールかのものであった……。こうした魅了する神々しいばかりの女性たちの力は、不在と墓とを越えて延びていく……。そしてこれこそ、われらの小説家やモラリストがまだ十分深く究明していない、人間の心の動機「仕組み」のひとつなのである！ 彼らはむしろ反対に、優しく幸福な恋人が死別した熱愛の対象の代わりに別の対象に思いを向けたりすると、驚いてしまう！ まったく！ 幸福自体が、自分の新たな選択を促し急がせるのだ！ 人はむしろ嫌悪の対象の記憶に対してより忠実である。こうした対象は心を閉ざしてしまう……。 (I. 1075. 傍点引用者)

他者との関係はつねに喪失された関係の反復である、とレチフは述べている。失われた女性は新たな女性にとって代わられる。この置換のプロセスの起源が欠如であることはすでに見た。これに加えて、引用した一節では、「ほろりとする」être attendri というレチフが濫用する表現とともに、「思い出」の作用が強調されている。この想起の作用

は、たんに女性との幸せな日々を喚起して、主体を幸福で満たすものではないだろう。重要なのは、幸福がすでに過ぎ去ったものであることを確認することであり、喪失が決定的であることを思い出すことこそが——逆説的にも——主体に喜び——ほろりとさせる感動——を与える。想起を通じた喪失の確認行為は、よく知られたレチフの記念日への偏愛として現れる。たとえば、一七六九年九月十四日にサントンジュ通りの家でヴィクトワールと至福の時を過ごしたことはほとんど重要でない。翌年、同じ日に、同じ通りで彼女のアパルトマンの窓を見ながら一年前の出来事を思い出すときにレチフはほろりとするのである。彼は一年前に壁に書いた彼にとってほとんど初めての「碑銘」——「一七六九年九月十四日、ヴィクトワールによる言葉にできぬ幸福」——を眺める。「私の心は震えた!……: これほどの感動が感じられたことはないだろう……。サントンジュ通りに魅力を与えたのは「……」この感動、この思い出だったのである。」(I 213)。こうしてナルシズムに関する決定的な一節が書かれる。

とするなら、愛においてわれわれが愛するのは対象ではなく、対象がわれわれの存在に与える瞬間的な魅惑であり、愛する女性への精神的な愛は、われわれ自身に対するロマンティックで夢想的な²⁷愛にはかならないということになるのだろうか?……「……」ということは、ジャンネット、パランゴン夫人、マドロン・バロン、ゼフイール、ネカール、ルイーズ、そしてテレーズを通して、私は私自身を愛していたのだ!…… ああ! われわれはみなナルシスなのだ! (II 213)

しかし、ひとつ問いが残る。他者愛が結局は自己愛であるのはよいとして、レチフの言う自己愛とは喪失の確認の喜びである。しかし何故、喪失を反芻することが喜びを引き起こすのか。レチフはフロイトが『快原則の彼岸』で直

面したのと同じ問題につきあたっている。これについては本論の最後で立ち戻ることしよう。ここではさしあたり、先ほどの引用 (197c) に関して論じ残した点を指摘しておきたい。レチフは過去の女性への思い出が新しい女性への情熱を生み出すのだと述べるが、この心理プロセスは必ずしも自明ではない。失った女性を思い出す行為が喜びをもたらすのだとしても、それが新しい女性への欲望を生まず、主体を思い出のうちに自足させてしまうことも十分に考えられるからである。ここでレチフが行っているのは、じつはたんなる回想ではなく、喪失を確認する想起の作用を未来に向けて投影する行為なのではないだろうか⁽²⁸⁾。過去の女性の思い出が新たな女性への情熱を掻き立てると言うとき、レチフが意味しているのは、彼がこの新たな女性をも必ず喪失することになり、その喪失に対してふたたび感動を味わうはずだと、出会いの当初から——いわば未来完了的に——確信しているということなのである。彼が女性との出会いを求めるのは、相手を失うためである。

こうしたメカニズムによって、喪失された対象は衝動となって主体を生涯にわたってつき動かす。レチフ文学においては、他者への欲望はつねに喪失体験——すでに経験されたものであれ、未来に仮構されたものであれ——に由来する。通時的に見れば、対象を喪失した結果として自己のうちに欠如が生じることになるが、喪失体験の反復において、両者は構造的に相関するようになる。ナルシスが失われた対象のうちに見ているのは自己存在のはらむ欠如なのである。

消滅する主体

マルグリット・パリス

レチフは作品のなかでくり返し自分が根無し草であることを強調している。彼は、自分を幸福にしてくれるはずの唯一の愛の対象である女性を得ることができなかった。ジャネットとはつきあうことすらできなかったし、最大の庇護者パランゴン夫人には暴行をして、しかも先立たれてしまった。また、故郷の村で農夫として質素だが幸せな生活を送れたかもしれぬ可能性は、オーセールやパリに出たことで潰えてしまった。『ムツシュー・ニコラ』が描くレチフの後半生は失楽園の世界である。彼は帰るべき故郷の村を失い、善良な恋人につきつぎと先立たれ、有利な結婚話には失敗を重ね、妻アニエスとはおりあいが悪く、義母には苦しめられ、周囲に「悪人たち」が蠢くの苦しみつつ、貧窮のなか執筆だけに支えを求めるかのように生きていく。

幸福を保証してくれる充溢した「根源」が消滅してしまったレチフ文学の世界を、前節では女性の置換系列における最終的対象の不在という側面から見た。ここでは視点を反転させて、女性との愛情関係における主体（レチフ）のありようをより詳しく検討してみたい。あらかじめ議論の見通しを述べておけば、われわれはまず、主体として愛する女性を充足させる位置に立とうと妄想するレチフの姿を確認することになろう。女性たちは、成就されなかった、あるいは成就してはならない悲恋を、レチフを相手にかえて再演する。彼は、女性にとっての愛の最終的对象として現れるのである。とはいえ、これはレチフが——妄想の世界においても——充溢した主体であったことを意味するわけでは必ずしもない。彼はむしろ自己の主体の消滅を確認し、自己の欠如に喜びを感じさえするだろう。しかし、先走りせずにまず第一点から見ていくことにしたい。マルグリット・パリスの逸話はこの問題を考えるのに適当な例で

ある。

マルグリット・パリスはクールジの司祭であったレチフの長兄のもとで「家政婦」gouvernanteとして働いていた。一七四七年末からこの兄の監督下で勉強することになったレチフは、ジャネット・ルソーをはじめ見て生涯にわたる恋心を抱く一方、性的に成長するなかで身近にいるマルグリットにも欲情するようになる。ジャネットの姿を目にできずに悶々としていたレチフは、この「四十歳」だがまだ「若々しい」マルグリットに思いを向けたのだった。「女性のこの年齢は、思春期を迎えた若者にとって欲望の妨げにはならない。それどころか、優しく相手を愛す場合ではなく快楽を得ようとする場合は、若者はむしろ成熟した女性に惹かれるようなのである。マルグリット・パリスは、姿が美しく、清潔で装いも小綺麗にしていた。髪のかき方も趣味がよく、ルソー嬢とまったく同じだった。」この年長の女性との関係は、パランゴン夫人に対する思いと同じく、レチフの母に対する近親相姦的欲望を表しているだろう⁽²⁹⁾。一七四九年の聖母被昇天の日、彼女は「白い縫い目もまだ鮮やかな、黒いモロッコ革の靴を履いていて、この靴の細い踵は、彼女のすばらしい脚をいっそう細く見せた」。レチフの視線は彼女の脚に釘付けになる。晩禱のあと、白い部屋着に着替え、座って野菜の皮を剥いていたマルグリットの白いふくらはぎと、その「爪先にぶら下がっている美しいミュール」を見たレチフは気絶しかけるほどの興奮を覚えている (I, 215-216)。秋になり、オーセルへ二人で買い物にいった途上でレチフはマルグリットに激しく欲情し、帰宅後の深夜、彼女がかつての求婚者の夢を見ているところに忍びこみ、思いを遂げてしまう (I, 233)。やがて彼女はレチフに妊娠したことを伝えるが、ジャネットを大事にして結婚するようにとさとし、子供をレチフからもらった「決して忘れられない贈り物」と考えて自分は身を引くと告げて (I, 248-249)、妊娠が周囲に気づかれるようになるまえにパリの兄のもとへ旅立っていく。この事件は若いレチフにとって大きな悔恨の種となるものだった (I, 209)。

『ムッシュ・ニコラ』が示すマルグリット・パリスの物語は、他の数多くの逸話と同様、たくさんの虚構を含んでいる。テスチュなどの研究によりながらもまずその概要を示してみよう。

若き日のマルグリット・パリスの人生は、『ムッシュ・ニコラ』で彼女自身が語った話によれば、次のようなものだった(1928, 23)。彼女は、レチフの長兄より二代前にクルジの司祭を務めていたポルヴェの姪で、未亡人であつた母とともにおじの家で育つが、十六歳で母を失つた。彼女はその頃、教師と公証人を志すルソー(ジャネットの父)とよく家で会うことがあり、彼に好意を抱くようになっていた。おじのポルヴェは性欲が強く、マルグリットに思いをかけていたが、彼女がルソーといて嬉しそうにするのを見て、またルソーも彼女に気があることを見てとつて嫉妬し、姪を修道女にする計画が整っているとルソーに嘘をついた。彼が(将来結婚しジャネットをもうけることになる)スタラン嬢の方へ通うようになったのはこれが原因だった。ルソーが身を引いた後には若いドウネーヴルが、マルグリットに結婚を申しこむ決心をし、彼女も好意を抱く。彼は良家の出身で、ポルヴェの前任司祭の縁者だつた。しかし、ポルヴェこの結婚話に激しく怒り、ついにはドウネーヴルを銃で撃ち、彼はその傷がもとで二週間後に死んでしまう。人々は、彼はマルグリットへの恋情のために死んだのだと語りあつたという。ドウネーヴルは死ぬ前に彼女に事情を知らせる手紙を送っていたため、彼女はおじを非難したが、彼は逆に彼女を強く非難し、ついには彼女を犯してしまう。彼は、彼女がいなくなることに耐えられなかつたのだ……。おじは同じ年、ルソーの結婚の一週間後に死んだ。マルグリットはその後も司祭館にとどまるが、前任者ジャコ司祭の甥に犯されたこともあるという。

レチフは、その後に得た情報によつて補うと次のようになるといつて、マルグリットの告白にさらに次の「事実」を加えている。すなわち、マルグリットはじつはルソーと関係を持ち子供を産んだのだが(この子供の運命については思わせぶりに伏せられている)、その回復後に、怒つたおじは彼女を陵辱した。この関係からふたたび妊娠するこ

とを恐れた彼女は、ドゥネーヴルの結婚の申し出を受けて関係を持ったのだが、おじはその同じ日にドゥネーヴルを撃つてしまう。おそらくドゥネーヴルとの関係から生まれた子供は、じつはマリアンヌ・タブエ——マルグリットの名付け子で、後にみるとおり、彼女はレチフにマリアンヌとの結婚を勧めていた（I 219）——で、本物のマリアンヌの死後、彼女の両親は、密かにマルグリットの子を自分の子の身代わりに使っていたのだという。マルグリットにはさらにふたりの子（ひとりとは修道士の、もうひとりはジャコ司祭の甥の子）がいたが、やはり貞潔な女性であった、とレチフは結んでゐる（I 231）。

テスチュが指摘するとおり（I 1269）、ルソーとマルグリットの子供は『人生劇場』によれば、ジャネット・ルソーその人だという！

あなたは若い。でも人柄はよく知っているから、ひとつ告白することにしますね。これはいままで誰にも、司祭様〔レチフの兄〕にさえ打ち明けたことのない話です……。私は妊娠していました……。私の恋人〔ルソー〕の子です……。彼は、そうしたなかで結婚したのです……。私たちはふたりとも妊娠のことは知りませんでした……。私の絶望がどんなものだったか考えてみてください！……。そして彼の絶望も！ これ以前に、私たちはおじに結婚を認めさせようとしていたのです……。でも望んだ結果を得ることはできないと絶望していました……。私が妊娠しているのを見て……。私のおじは……。恐ろしいことは、話すのをやめておきますね！……。私はひそかに娘を出産しました……。ルソー夫人も同じように娘さんを生んでいました……。おじは……。どうしてそんなことをしたのか私には分からないのだけど……。私の娘を嫡出の娘と……取り代える手段を見つけたのです……。嫡出の娘さんの方は当然亡くなりました……。そして……。あのジャネット……。あなたの愛して

いるジャネットは……、私の娘なのです！…… おじは死ぬときにこのことを私に明かしてくれました……。ジャネットは、感じやすい心をもつべくしてもっているのです、お分かりでしょう！……。もしあなたの愛を知れば、彼女はあなたを愛するようになります……。あなたを愛するとすれば、彼女は自分の母と父に似ているのです。彼女はあなたをずっと愛し続けるでしょう。他の誰でもなく、あなたを⁽³⁰⁾。

『ムッシュ・ニコラ』では、マルグリットは「私はジャネット・ルソーの母親になっていたかもしれないね。彼女のお父さんは私に求婚したのですから……。」(I, 198) と言っており、表面的にはジャネットの母であった可能性は否定されている。

シャルルールの調査によるなら⁽³¹⁾、事実は次のように訂正されなければならない。マルグリット・パリスは一七〇五年十二月十四日にシャブリで生まれた。彼女はクールジの司祭ジェルマン・ポルヴェ(ただし綴りはレチフの書く Polyé ではなく Paulève) の姪ではなく、 petite-niece (甥または姪の娘) で、六歳で母を失ったため、クールジで祖母に育てられた。残されたある証書によれば、三四歳の時点で彼女は「商人」とされている。クールジの司祭の「家政婦」となったのは、おそらく一七四五年で、レチフの兄が司祭となったのはその一年前のことだった(したがって生涯ずっと司祭館で過ごしてきたというのは誤りである)。ポルヴェが亡くなったのは一七一九年(つまり、マルグリットが十四歳の年)なので、彼女の年齢からいって、レチフが言うような事件があったとは考えにくい。実際、ジャン・ルソーの結婚は一七二九年のこと、また、マルグリットとしか結婚したくないと言ったとされるルイ・ドゥネーヴルは、一七二七年に結婚、一七三三年には再婚しているという(最初の結婚はルソーの結婚よりも前で、レチフの話と食い違う)。もっとも彼は、一七三四年、母の使用人にナイフで傷つけられ死んでいる。これがレチフの想像

源になったのであろう。

置換の最終項になること

さて、こうした虚構化について確認したうえで、レチフの妄想世界における〈置換〉の問題をあらためて考えてみよう。すでに述べたように、レチフはマルグリットと無理矢理関係を持つのだが、レチフはここで彼女のかつての恋人ドゥネーヴルの代わりを務めているのである。

真夜中、寝息から、みな^{モルフェウス}が夢の神の支配下にあることを確認したあと、私は音を立てずに起き上がり、どんな危険を冒そうとしているのかよく考えもせず、台所に入ってしまった。台所の戸はスパルタ式に「簡単な掛け金で」閉められていただけだった（「から、入るのは容易だった」）。私は手探りで家政婦のベッドを探した。これだ。聞き耳を立てる……。彼女は眠っていた……。私は彼女のとなりに身を滑りこませる……。マルグリットは夢を見て、もごもごと言っていた。「放して、ドゥネーヴルさん、放して！」私はこのために興奮し、自然と私の経験とに導かれ、彼女の夢を優しく実現してあげたのである……。 (I 232)

すでに見たように、レチフはやがてグルネル通りの家で恋人になりすまして女性と関係を持つ悪意あるいたずらをするようになるが、ここでしているのも意図をのぞけば同じような「なりかわり」、「身代わり」である。妊娠したマルグリットの心からドゥネーヴルの思い出は消えていた (I 239; 252)。レチフはかつての恋人の代わりとなり、彼女の満たされなかった気持ち占有したと豪語する。

マルグリットは、過去の悲恋を夢のなかで反復している。『ムツシユー・ニコラ』によれば、レチフとの関係は、意図せざることであったとはいえ、マルグリットにとってこうした悲恋の反復を断ち切るべきことであった。こののち彼女は、悲恋におわたった自分の愛情関係を、自分の娘とレチフを主人公にしたかたちで反復し、その幸福なバージョンを実現させようとする。レチフが自分のミュールを隠したことを知ったマルグリットは、彼がすでに性的に成熟しているのをあらためて確認して次のように語る。

「かわいそうな子！」と彼女は私に言った。「ミュールを隠したことは」許してあげます！ 昔、ルイ・ドゥネーヴル（これは彼女がつれなくしたので絶望した恋人の名前である）が……ある女性（つまりマルグリット）に……したのと同じことを、あなたもジャネットにできるらしいことが、これで分かりましたから……。」「……」ジャネットのことは言葉にできないくらい愛しているけれど、彼女の家は誇りが高くて、「……」司祭様の言うこともあまり聞いてくれませんか、もし彼女の代わりに、あなたがマリアンヌ・タブエに同じ気持ちを抱いていたなら……。彼女は私のいとこで名付け子で、ルソー嬢より年は下だけど、ほとんど同じくらい綺麗ですわね。あなたもご覧のように背は大きいんだけど、まだ十五歳にもならないから、あなたの年齢を思えば、ジャネットよりお似合いですよ。それで、もしマリアンヌを好きになって下さっていたなら、ふたりが適齢期に達するまで私はゆつくりと準備しておいたんですけどね。日を見て、あなたのご両親にお話し、私のそれなりのちよつとした財産を持参金として保証すれば、おそらくうまくいくと思うのだけど……。でも、ルソー家とではどうしようもないでしょう。彼らは誇りが高いし（私はそれを非難はできないでしょうが）、それに、なんというか……あの……人のお嬢さんに私が持参金を出したりはできないですし……。噂になってしまいうでしょうから。」（「

ここでは、マルグリット／ドゥネーヴルという潰えてしまった愛情関係が、娘マリアンヌとレチフの結婚を通して現実のものとなることが望まれている。すでに引いた『人生劇場』の一節によれば、ジャネット・ルソーとの結婚話についても同じことが指摘できる。つまり、マルグリットとルソーの関係が、娘ジャネットとレチフの関係において反復され結婚に結実することが夢想されているわけである。

『人生劇場』では、マルグリットはレチフと関係を持ってしまったため、レチフとジャネットの結婚を望まなくなつたとされる⁽³²⁾。つまり、ジャネットはマルグリットの娘なので、レチフは母娘双方と関係することになり、一種の近親相姦——義理の父と義理の娘との結婚——になるからだと考えられる。『ムッシュー・ニコラ』では、マリアンヌ・タブエとの関係も含め、こうした点は曖昧なまま話が展開しているようだ。

同じことは、じつはパランゴン夫人とファンシェットの姉妹についても指摘できる（ここでは娘のかわりに妹が登場する）。『ムッシュー・ニコラ』は妄想を膨らませ、夫人は自分が結婚している以上、道義的に満たすことのできぬレチフへの思いを、妹ファンシェットとレチフとの関係において反復し、現実のものにしたいと願っていた、として、夫人に次のように語らせるのである。

私はあなたのことを愛しています。でも姉としてね。考えを決めました。おそらくもし私が自由の身であつたら……。でも仮定の話はなしにしましょう……。あなたは私が世界で一番好きな人です。父も妹もあなたほどには好きではありません。あなたはこのふたりとともに、私の心の聖域にいるのですから……。私は祈っています。

あなたと……一緒になっていたら……私は……幸せになっていたでしょうが、そんな風にファンシエットを幸せにするため、あなたが彼女の夫となったときに、今日話しあったことを決して忘れないようにお祈りしているのです。こんな打ち明け話をする、徳の怒りを買うのは分かっていきます……。お話したのは、罪深い傾きを煽るためではなくて、それを消すためなのです……。 (1653)

こうして、愛情関係における喪失体験が惹起する反復において、レチフは置換プロセスの最終項を体现する。マルグリットもパラゴン夫人も、彼の結婚を実現することによって、自分の思いを別のかたちで現実化し、喪失体験から回復することを夢想する。彼は、不幸な連鎖を断ち切り、相手の欠落を埋める充溢した主体として現れるのである。

主なき言葉と〈父〉の位置

しかし、こうした自己の理想的な姿が妄想的に示される一方で、これと表裏の関係をなすように、自己存在のほらむ欠如がさまざまなかたちで変奏される。そのため、充溢した主体はむしろ欠如を想像的に補完する代理表象であるように思われてくる。このことをレチフのテキストに現れる〈匿名性〉の問題から考えてみたい。

グルネル通りの事件において、レチフは女の恋人になりすまし、いわばその背後に隠れて匿名の存在として振る舞っていた。自己の正体を明かさぬことは、相手に対して優位に立つことを可能にするから、匿名性とは権力主体の属性である（先ほどみたファリックな欲望はこれと関係しているだろう）。しかし、レチフのテキストを読んでいくと、彼の身を隠す行為は、自己を言葉あるいはエクリチュールのうちへと消滅させる営為と深くかかわっているように思われてくる。すでに見たとおり、『ムッシュ・ニコラ』では実人生と虚構がわがたく混淆していて、われわれ

は饒舌な語りの背後にレチフの「本当の姿」を見失ってしまうのであった。ここでは、彼が言葉の背後へと身を隠すこれとは別の方法について見てみよう。

『ムッシュ・ニコラ』は、「秘密の手紙」という道具立てをさまざまに変奏している。自分の正体を明かさずに恋文を送りつけたり、あるいは姿を見せずに恋歌を歌ったりするのは、そうした変奏のひとつである。レチフは、身を隠してエドメに歌を歌ったり (I, 435) —— 同じテーマ系で言えば、エドメには、とある結婚式で仮装して身元を明かさずに話しかけてもくる (I, 715) ——、正体を知らせずにデュグラヴィエのために花束を置いたり (I, 527) という、他愛ないいたずらをする。ゼフィールとその娘ゼフィレットをめぐる逸話では、この主なき声、送り手の分からぬ手紙のテーマがさらに重要な意味を帯びて現れている。一七五八年、ゼフィールの献身的な介護でパランゴン夫人の死の痛手から回復し、彼女との結婚を思い仕事に精を出すようになった年、レチフは彼女と直接会うのは土曜日の夜、日曜および祝日だけにとどめ、普段は彼女が働くようになっていたギラン夫人の服飾店に近づき、姿を見せずに外から歌を歌って合図を送るだけになっていた。声の主がレチフであることを、ゼフィールはスュアデル以外には教えなかったし、平日の仕事時間にレチフが姿を見せることはなかったから、店の娘たちが彼だと気づくことはなかった (彼は店に入るときには着ていったことのない「スペイン風マント」に身を隠してさえている)。レチフはオペラ座、イタリア座、オペラ・コミック座などで聞いたメロディを替え歌にしたり、あるいは即興の節にのせて「自然そのものが感興を与えるままに」気持ちいを歌う。ゼフィールはひとり密かにレチフの声を認めて、彼に合図を返す。彼らは、ふたたび秘密を共有することに喜びを感じていたのである (I, 1036-1036)。レチフはさらに、宛先を明示しない恋文を書き、それを扇形に折って隙間から押しこみ、中にいるゼフィールに送るようになる。これが同じ店で働いていたフロランスに「横取り」されると、ゼフィールを父のような愛情で愛していたレチフは、店の娘たちにも読まれる

ことを前提に、貞淑や慎みを説く手紙を書いて彼女たちに感銘を与えた。とともに、ゼフィールから彼女たちのことを聞き、「謎当て」とすると称してそれを手紙に盛りこむようなこともする。送り主の分からねぬ手紙が不思議にも自分たちのことを言い当てる、そんな謎めいた事態に娘たちは興味を掻き立てられた (I: 1038-1039)。

喪失の反復的代償行為をその本質的構成要素とする『ムッシュ・ニコラ』は、この挿話も再演、再演させてみせている。ゼフィールとの交渉から十八年後の一七七六年、レチフは、ギラン夫人の三女ヴィクトリーヌ——結婚してモンクル夫人となっていた——の店で働く娘たちに興味を覚えるようになる。その中でもひととき興味を惹いたのがプロンドの娘で、レチフはそれをモンクル夫人の長女だと勘違いしたが、じつは娘ゼフィレットであった (I: 1038-1039)。レチフの振る舞いは、ゼフィールに対する振る舞いの反復である。

彼女は本を持っていた。そして私は彼女がこの家の長女であると考えていた。というのも、ヴィクトリーヌは彼女と同じくブロンドだったからである……。『なんて美しい色だ！ 肌の血色もゼフィールと同じだ！……』私はそこで晩に彼女を調べに来て、即興の歌を歌った。(II: 306)

私は最初、手紙を書かずに、ゼフィールに対してしたように、歌を歌った。私は、〔店の〕カーテンが動くときに身を引くようにしていた。(II: 309)

レチフはやがて彼女にも手紙を書くが、この有徳な手紙が店の娘たちに読まれるのもかつてと同じである。

私はついに彼女に手紙を書くことを決心した。しかし、「店の右手奥にいる」彼女のもとに届くまでに、手紙は複数の手を渡らなければならない。私は、手紙が啓発的で誰に読まれてもよいものになるようにした。彼女は「私が手紙を書く」と決心した」その同じ晩に手紙を受け取った。私は手紙がこの美しい人に読まれるのを見た。彼女が敷居のところをやってきたので、私は彼女の前を通りすぎながら、次のように言った。「私はあなたのおばあさんを口説き、あなたのお母さんを口説き、あなたも口説いています。」彼女は家に入りながら大笑いした。

(II. 309)

レチフはこの言葉を口にしたとき、ギラン夫人／ヴィクトリーヌ・モンクラール／その長女という三代を考えていたのだが、じつは口説いていた相手はゼフィレットだったのだから、ナネット／ゼフィール／ゼフィレットの三代のことを知らずして言っていたことになる (ibid.)。ここでは反復は無意識に行われているのである。

この挿話はさらに念入りに、ゼフィレットが姿を消したあとにも反復される。ここでレチフは女性たちの正体をくり返し見誤る。愛の対象は、ただ置換されるだけでない。個々の女性の同一性自体が差異を内包しはめるのである。ゼフィレットはすでにゼフィールの化身だったが、このゼフィレット自身をレチフはヴィクトリーヌの娘と勘違いし、アガートと呼んでいた。と同時に、ヴィクトリーヌの本当の長女アメティストは次女だと勘違いされ、オルタンスと呼ばれる。ゼフィレットが店をやめたのち、彼女が座っていた奥の席は、アメティストによって占められるようになること (II. 310)、アメティストがいなかったときはアメリーが座ることになること (II. 311) がことさらに強調され、しかもレチフは、アメティストと書くべき箇所アメリー——これはゼフィールの死後に結婚を約束したスュアデルの名のひとつであったため、レチフは彼女に強い関心を抱いていた——と書き間違えてさえる³³。こうしたズレ

と置換の力学がレチフのテキスト全体を貫く。

関心がアメリカに移っていくと、レチフは彼女——足が美しいので惹かれる、という点でも欲望が反復されている——に対しても即興の歌を歌い、ついで扇形に折って手紙を室内に入れている。

私は美化せずに自分の肖像を書いた。私は、手紙を送る相手、その名前を挙げた相手を褒め称えた。ついで、かつてゼフィールにしたように、またより最近ではゼフレットにしたように、自分の手紙を扇形に折りたたみ、その長さを利用して、直径一ブース〔約27ミリ〕しかない隙間を通すことができるようにしてから、喜びにうち震えながら（男が子供だというのはこれほど本当のことなのだ―）、窓のところに歌に行った。アメリカの注意を喚起すると、私はすぐに手紙を忍びこませた。彼女は、自分の背後に手紙を感じ、最初は身震いしたが、ついで安心すると、手紙を手にとった。私はそこで、オノレ通りまで駆けていき、カーテンが開いていた窓から彼女がどんな様子なのか見ることにした。彼女は顔を赤らめ視線を落としてはいたが、満足げな様子だった。〔……〕アメリカは私の手紙を「店の娘たちに」示し、声をあげてそれを読んだ。娘たちはみな息を飲んで聞いていた。私はと言えば、彼女たちの様子を言い表せぬほどの喜びを感じつつ眺めていた。（II, 312）

こうしたレチフの振る舞いは八ヶ月も続き、彼はそのあいだ、有用な道徳を興味深い物語に含ませ、次回に興味を持たせるかたちで娘たちに手紙を送りつづけた。それをもとにして作られたのが『四十男』なのだという。いずれにせよ、プレイヤッド版の註でテスチュが指摘するとおり（II, 1248）、ここには自分の書き物が読まれるところを窃視したいというレチフの作家的欲望が現れている。自分の正体を知られることなく、自分の書いたもの（あるいは歌）が

人々に読まれる（聞かれる）のを観察することで、自作が他者にもたらす効果を確認する、一種の全能性に由来する喜びである。

ここでレチフが占めようと望んでいるのは、結局、父＝神の位置である。ゼフィールに対するレチフの愛情は父親のような気持ちであり（I, 1086）、彼女への手紙の文体は父が娘に宛てて書くときのものであった（I, 1039）。娘たちに有徳な物語を語るとき、レチフは『わが父の生涯』で描かれたあの有名な場面を反復していることになる。使用人も含めた「家族全員」が集まる夕食後、レチフの父が読み聞かせた聖書の一節はみなに深い感銘を与え、翌日の話題になるほどだった。冬にはさらに、ためになる物語を語ってくれ、家族は楽しい時間を過ごすことができたという⁽³⁴⁾。聖書を朗読する父は神の代理人である。その声を聞いて家族はみな楽しみながら徳性を高めることができる。これはレチフが娘たちに与えようとした効果そのものである。

とはいえ、レチフが多くの女性を宛先としてくり返し歌や手紙を送った行為に、言葉の源泉であろうとする全能性への欲望だけを見るべきではない。レチフはこうしたモンクラールの娘たちを相手とする遊びになぜ喜びを感じたかを問い、ゼフィールとの交渉を思い出させるから、という理由のほかに、その直前に起きたヴィルジニーとの別れが与えた心の傷が女性との直接的な交渉を恐れさせたからだと述べている。

私がヴィクトリーヌ（・モンクラール）の娘たちに興味を抱いたのは、ただ彼女たちの置かれた位置（situation）が魅力的だったからである。私は彼女たちに話さずにすんだ（sans que je leur parlasse）、すなわち私の心を危険に曝すことがなかったのだ。というのも、読者も知るとおり、ヴィルジニー「との別れ」以来、私は愛に対して恐れを抱いていたからである。（II, 308）

レチフはここで「話す」parlerことを、正体を明かさずに歌を歌ったり、手紙を送ることから区別している。それは、発話者として自分を明示して相手との交渉に身を投げ入れることとなる。モンクラールの娘たちを相手とする遊びは、ゼフィールとの遊びの意図的で執拗な反復であるが、ゼフィールとの逸話では彼女だけはレチフを言葉の主として認知しているのに対して（つまり、彼は匿名性を装いつつ結局「話して」いる）、モンクラールの娘たちは最後までレチフの正体を知らない（翌一七七七年十月六日に彼はアメリカの前に姿を現す約束をするが、徳を説いてきたのに既婚の男が若い娘の前に姿を現せるかと自問し思いとどまる。こののち娘たちは手紙を焼いてしまうようになる（II, 314）。ゼフィールには自然の感興のまま思いを歌にしていたのだが、モンクラールの娘たちへの関心は、たんに自分の姿を見せずにすむという彼女たちの置かれた「位置」や、ゼフィールやスュアデルの思い出に由来しているから、レチフの気持ちはどこか虚ろである。彼が一七七七年から七九年にかけてとても幸福な日々を過ごしたと言えたのは、ヴィルジニーや、やがて出会うサラとの交際のときのように不安や嫉妬を感じずにすみ、彼自身の「心」が危険に曝されなかったからである。レチフはむしろ姿をみせずに手紙を書くことが娘たちにもたらす効果を誇り、結婚していなければこの手管だけで相手をものにできていたはずだとまで書く（II, 315）。

一七七六年六月に出会ったヴィルジニーをレチフは自分の娘のように遇した。彼女も彼を「パパ」と呼んで気持ちに応え、事情を知らぬ人々が彼らを親子と思うこともあった（II, 275; 277-279）。レチフはヴィルジニーのうちにゼフィールの面影を見ていたが、彼女がじつはレチフの娘だったのもゼフィールの場合と同様である（II, 282; 289; 304）。しかし、ヴィルジニーとの関係で、レチフは四十歳を越えた自分が「初めて老人の役回り」をしていることを感じ、深く傷ついた（II, 295）。レチフはこれまで男女関係に父娘関係を重ね合わせることで、より強い情動を得よう

うとしてきたが、ここで大きな挫折を余儀なくされる。彼女は、ピセートルでの最初のデートでは敬虔で優しい面を見せていたが、囲われ者であるうえに、若いコンパンを恋人に持ち、娼婦まがいのことまでしていた。レチフはなによりもコンパンに激しく嫉妬する。彼は、父Ⅱ夫として二重に愛されるはずだったが、むしろ父Ⅱ老人として若い娘の相手にはふさわしくない存在になってしまう（これはサラとの悲恋で反復される）。とともに、若い真剣な愛は消え、ただ快楽を得るだけに相手に気に入られようとする老人特有の墮落に陥る危険を彼は感じる（II 284; 290）。レチフは、ヴィルジニーが別の男に囲われたのを機に身を引く。ちょうど同じ頃、かつてつきあいのあったエリーズとまた会うようになるが、一緒にいたりゼットにあまりにも惹かれるので、どちらにも会うことをやめてしまう（エリーズはほどなくしてジュネーヴで亡くなる）。このリゼットはじつはレチフの娘で、おなじ家にいた九歳の少女エリゼットはエリーズとレチフの娘だった（II 301）。彼女たちと暮らすことにしていれば幸せになれたのに！ 執拗なまでに反復される自分の娘の発見譚は、幸福への渴望を示すと同時に、幸福を取り逃がす物語、より正確に言えば、自分の方から幸福を逃れる物語である。

私はいつも、自分を幸福に、あるいは平安な気持ちにしてくれるものからすぐさま離れてしまったのだ。
(II 300)

『ムッシュ・ニコラ』はつづけて後日談を語る。一七八〇年、偶然ヴィルジニーと再会したレチフが、知人の貴族に彼女を紹介したところ、彼はとても気に入る、ふたりは幸せに暮らした、というのである（II 307-308）。他人を幸せにできて、自分の幸福は何度もとりのがす。レチフが飽くことなく反復する物語は、幸福の可能性を確認す

る行為なのである。そしてこれは、〈父〉が幸せになれない物語でもある。レチフは充実した〈父〉の位置を欲望しつつも、決してそこに身を落ち着かせることができない。

レチフにとって娘を発見することは自分の〈分身〉を見出すこと、娘のうちに「自分を再認する」*me reconnaître* だった(H 302)。だから、幸福からの逃走とは、要するに分裂した自己を再統合することの拒絶である。レチフのテクストは、主体が何かを喪失し、その欠如を埋めるものをさまざまな対象に求めつつも、決して喪失を回復できぬ物語をくり返し示す。モンクラールの娘たちを相手とする軽い遊びは、失われたゼフィールの思い出の反復であるとともに、ヴィルジニーやサラとの真剣で辛い交際と表裏の関係にある。物語の反復行為は、失われた愛の対象を回復しようとする不可能な試みであると同時に、反復を通して喪失を再確認し、自分の心のうちの欠如を反芻するものである。こうして、われわれはふたたびフロイトが『快原則の彼岸』で提示した問題につき当たる。fort - da (いなくなった／あった)と消滅と出現を反復することに喜びを感じるの幼児のように、レチフは喪失を反復し、喜びを得る。喪失の反復に快を感じる幼児に対して、フロイトが戸惑ったことはよく知られている。彼はそこに自分が主要な原理としてきた「快原則」の「彼岸」、つまり「死の欲動」を見た。人は、いわば「物質」へと回帰しようとする傾向をもつ、というわけである。もちろん、フロイトの所説をそのままレチフに当てはめるのはたんなるアナクロニズムであり、むしろフロイトが理論化した事象をレチフがすでに彼の文学で表現していたのだと考えるべきなのである。レチフが描きだす主なき歌声、匿名の手紙は、失われた対象と、これに相関して主体が内包している欠如とのあいだを彷徨するシニフィアンである。レチフのテクストは、対象の喪失と主体の欠如とが惹起する反復行為を通じて生成する。あるいは、対象の喪失も結局は主体の欠如が外部に投影されたものだと考えられるから、それは主体がはらむ存在欠如を空虚な核として、その周囲に無限に増殖していくものである。主なき言葉とは、結局、この存在欠

如のシニフィアンなのである。

主なき言葉となつてひたすら自分の身を隠そうとする衝動的とも呼べる傾向は、自己の存在欠如を確認する営みである。レチフは明示的な理論にはしていないが、同工異曲の場面を執拗にくり返すことでこれに文学的な表現を与えている。たしかに、自分の正体を見せないことは、自己の優位を確保する手段としても語られているし、ここでもそうした全能感はその感じる喜びの一部をなしているだろう。しかし、この全能感、自己の存在欠如を想像的に補完するものであり、充実した主体、反復の最終項となりうる主体は、あくまで主体の欠如の代理表象と考えるべきであろう。

モンクラールの逸話に先だつ一七六四年十月、レチフはパランゴン夫人の生まれ変わりとでもいうべき(II, 157) ローズ・ブルジョアに強く惹かれ、正体を隠して手紙を届けつづけた(II, 150 sqq.)。ここでも、いかにして自分の尻尾をつかませないか、ローズの店の者たちの監視をどのようにかいくぐるかについてレチフはさまざまに策を弄しているが、彼はついに捕まり、ローズの父と会談することになる。父親は、レチフの手紙を見て、才能があるのだからそれを実地に示して世に出れば、ローズとの結婚もかなうかもしれないと言ったという。『ムツシユー・ニコラ』はこれを作家への転身の重要な契機として提示する。彼は後年、ローズたちが住んでいた家に向けて、*«Salve. o domus, quae me fecisti scriptorem!»* (おお、私を作家とした住まいよ)と呼びかけた(II, 158)。(父)の位置をめぐるレチフの両義性は、この逸話のうちにさらに特徴的なかたちで現れている。『わが父の生涯』によるなら、ローズ・ブルジョアは、レチフの父が結婚するはずであった恋人ローズ・ポンブランの妹ウジェニーの孫であった。レチフは、父の若き日の悲恋をいわば反復することで父と同一化しつつ、幸福な結婚を取り逃すことでやはり(父)になりそこねる。しかも、父がローズ・ポンブランに対してつねに誠実に振る舞ったのに対して、レチフは匿名の手紙

でローズ・ブルジョアを誘惑しようとしたのだから、徳は悪徳へと反転し、〈父〉は変質を余儀なくされる⁽³⁵⁾。匿名の手紙を書くとは、〈父〉になりそこねた存在が、それでもなお〈父〉のように振る舞おうとして、しかし〈父〉の位置からは絶えず逃れようとしながら、行う行為なのだ。充溢した姿で自己を示すことはできぬ存在が、それでも〈父〉を模倣して語るとき、その言葉は主なき言葉となる。レチフ文学は、〈父〉を否定し、つづつ反復することで成立する「代補^{スプレマン}」である⁽³⁶⁾。匿名の手紙が作家誕生の起源に置かれることの意味はこのように理解することができるだろう。モンクラールの逸話の最後では、(アメティストと義理の姉妹となる) コンスタンスに送ると約束した『わが人生の全物語』が『父の呪い』となり、ついには自伝『ムッシュ・ニコラ』のもとになったのだとも述べられている(II, 315)。作家としてテキストを公表することは、自己のテキストが読者に読まれる喜びを彼に与えたが、しかしこれは同時に、自己をテキストのうちに消滅させようとする欲望とも関係している。それは充溢した自己の表現からはかぎりなく遠い。読者の視線の先で、レチフの姿は、日記、フィクション、自伝といったさまざまな文字痕跡のうちへと消えていくのである。

*

ピエール・テスチュは、自作の道徳的有用性を主張するレチフの意図は誠実で、そこに欺瞞はないとしたうえで、しかし、彼を飽くなき執筆に駆り立てる「動機」はむしろもっと「個人的欲求」のうちにあるのだと指摘している⁽³⁷⁾。それは生のはかなさと忘却の危険を逃れるために文字の永続性に賭ける営為だった。レチフがたえず加筆・修正をはかり、つねにテキストを増殖させつづけたのは、文学的価値や文体的洗練を求めているのではなく、この

「実存的次元」に由来する欲求からだった。彼の作品が「度を超したもの」*demesure*となるのはそのためである。「彼の全作品の根底にはグラフィオマニー 濫書症があり、これはレチフにおいて、呼吸と同じく一瞬一瞬を生き抜くための方法なのである。「生きた書物」[« livre vivant »]は生きるのに不可欠な書物 [livre vital] でもある」⁽³⁸⁾。

しかし、レチフのテクストが示す彼の〈生〉は、本質的に〈死〉の次元を含みこんでいる。テストュの研究に多くを負いながら、本稿で示そうと試みたのはこの点であつた。執拗に反復される物語をとおして、「不可能な対象」と「消滅する主体」のうちに自己存在のはらむ欠如が明滅する。この欠如を空虚な核として惹起される反復（死の欲動）は、もちろん人間の存在構造一般を規定するものである。しかし、これはごく「普通の」人生を淡々と描くだけでは必ずしも見えてこない。レチフ文学の独創性は、実人生を虚構によつて変形し、同工異曲の物語を増殖させることで、無意識のうちに潜むこの存在構造を増幅し、読者に対して際立たせて示した点にある。自伝『ムッシュ・ニコラ』が夥しい虚構と反復を含むことには、おそらくこのような積極的な意味がある。

註

- (1) Pierre Testud, *Réif de La Bretagne et la création littéraire*, Librairie Droz, 1977, p. 701.
- (2) 古文書を調査したジルベール・ルジェは、すでに一九三〇年の論考で、『ムッシュ・ニコラ』のオーセール時代の叙述が含む多くの虚構を逐一指摘している。Gilbert Rouger, « Réif auxerrois », *Annales de Bourgogne*, Centre d'études bourguignonnes - Société des annales de Bourgogne, mars 1930, p. 56-69.

- (3) よく挙げられるOEDの記述にしたがえば、autobiography は一八〇九年の批評記事でロバート・サウシー Robert Southey が用いたのが初出とされるが、ドイツ語圏では一七七九年の用例まで遡ることが可能であるとゲル (Georges Gusdorf, *Lignes de vie I. Les écritures du moi*, Odile Jacob, 1991, p. 64-65)。
- (4) *Ibid.*, p. 74-75, 214-229.
- (5) *Ibid.*, p. 230. ルカルムが指摘するとおり、ほんじた意味ではギューストルもルジュンヌと同様にルソーの『告白』を画期とみなすことになり得る (Jacques Lacarne et Éliane Lecarne-Tabone, *L'Autobiographie*, 2^e éd., Armand Colin, «U», 2004, p. 21-22)。
- (6) Jean-Jacques Rousseau, *Preamble des Confessions* dans le manuscrit de Neuchâtel, in *Œuvres complètes*, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», t. I, p. 1150, cité in: Rolf Wintermeyer, «Introduction», «*Moi public*» et «*Moi privé*» dans *les mémoires et les écrits autobiographiques du XVIII^e siècle à nos jours*, Publications des Universités de Rouen et du Havre, 2008, p. 22.
- (7) Wintermeyer, *op. cit.*, p. 23.
- (8) 『ムッシュュー・ニコラ』からの引用は次のブレイヤッド版により原則として巻と頁のみを示す (ただし明示の必要があるとある N. の略号を用いた)。*Monsieur Nicolas*, édition établie par Pierre Testud, 2 vol., Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1989.
- (9) テスチュは人間の行為の因果関係を示すというレチフの宣言にも関わらず、『ムッシュュー・ニコラ』は分析というよりは物語であると指摘している (*op. cit.*, p. 482)。
- (10) 『墮落百姓兄妹』は、『墮落百姓』とその姉妹篇『墮落百姓女』が一冊にまとめられたものである。
- (11) 引用したセリフの原文は次のとおり。「*Écrite tout le monde... si tu veux... mais pas Zéphire! elle est si bonne fille!...*」『墮落百姓』では対応する箇所は次のようになり得る。「*Ah! fuyez tout le monde, si vous le voulez, mais pas Zéphire! Elle est si bonne fille!...*」(*Le Paysan perverti*, dans l'œuvre de Restif de La Bretonne, t. I, édition établie par Pierre Testud,

Robert Lafont, « Bouquins », 2002, p. 572. (以下『PP』の略号を用いる。)『ムッシュ・ニコラ』のセリフはわざわざイタリアックで強調されてつく『墮落百姓』のあのセリフは、このときの言葉なのだ、と言わんばかりである。

- (12) Rouget, *art. cit.*, p. 67.
- (13) Jean-Claude Courbin, « Zéphire identifiée? », *Études rétiniennoises*, n° 1, 1985, p. 40-41.
- (14) Paul Vernière, « Balzac et la genèse de Vautrin », *Revue d'histoire littéraire de la France*, 1948, n° 1, p. 53-68. P. J. Wagstaff, « Vautrin et Gaudet d'Arras: nouvelle évaluation de l'influence de Restif sur Balzac », *Année balzacienne*, 1976, p. 87-98.
- (15) Rouget, *art. cit.*, p. 65.
- (16) I. 941-942; 1329-1331. Testud, *op. cit.*, p. 161-168.
- (17) I. 579; 640. レチフ自身による参照指示は必ずしも正確ではない。以下、スラトキン・リプリント版全集の『墮落百姓兄妹』*Le Paysan et la paysanne pervertis* で該当の番号と頁数を示す（ただし、版画には頁がふられていない。「」に入れたのは前後の頁である。また第四巻末尾の版画一覧の番号と本文欄外の番号も必ずしも一致しないので、一覧表の番号を示す）。
N° 38, t. I, p. [534-535]（パランゴン夫人からの口づけ）、n° 43, t. II, p. [84-85]（エドモンは大胆にも夫人の胸に手をやる）、
n° 44, t. II, p. [96-97]（暴行）。
- (18) N. I. 989, *Le Paysan et la paysanne pervertis*, n° 80, t. III, p. [316-317].
- (19) N. I. 966, *Le Paysan et la paysanne pervertis*, n° 93, t. III, p. [478-479]. ただし『ニコラ』では、レチフが女の部屋を出たあとに神父が部屋に忍んで入る箇所に参照が付されているが、挿絵はエドモンが女と寝ているところに神父が入ってくる場面を描いている。
- (20) N. I. 1103, *Le Paysan et la paysanne pervertis*, n° 97, t. III, p. [548-549].
- (21) N. II. 23, *Le Paysan et la paysanne pervertis*, n° 92, t. III, p. [456-457]. 怒った近衛騎兵たちがエドモンを毛布に乗せて宙に舞わせる。娼婦たちは心配してエドモンが落ちないように毛布の端を持っている。

若い色男の逸話を参考までに訳出してみよう。「私はちよつと前から、晩に若いお針子が、両親の家に寝て帰ってくるのに気づいていた。それは、オラトワール修道院の向かいの建物の四階だった。……」若いお針子は毎晩九時半に帰ってきた。このうえなく大胆であると同時に最も犯罪的な暴行を私は思いついた。私がこの話をするのは、親と司法官に教えるためである。ある晩、彼女がやって来たのを見ると、私は階段の二階と三階のあいだに身を潜めた。強風の日だったので、彼女の蠟燭は消えるであろうと思ったが、実際、そうだった。彼女が私のそばを通ったとき、私は決定的な自由を揮ってみた。若い娘は叫び声をあげなかった、私には彼女に恋人がいることが分かった……。彼女は座った。私は自分が彼女の愛する男と勘違いされているのだらうとは思ったが、これではまだ確実とは言えなかった。この男がどこまで行っているのか見てみることにした。私は彼女を腕に抱き上げ、自分の思うようにしてみた。その場は私の自由にできたから、私はこの征服を陽気なものにして、幸福を探し求めた。苦労はしたが、完勝だった。彼女の恋人はまだ完全な勝利を得ていなかったこと、彼が与えたいろいろな教えを私が利用できたこと、そして彼自身の墮落が彼へと跳ね返ったことを私は理解した。娘は私を拒んだり、あるいは助けたりした。しかしひとことも話さなかった……。天啓の瞬間に、誰かが登ってくる音が聞えたが、幸いにも灯りを持っていなかった。私はすぐ近くまで近づかせ、娘と一緒に壁に張り付いて、この者をやり過ごした。彼が合図をしたので、それが恋人であることが分かった。私は、いま奪い取ったばかりの娘を放し、彼女に対しては降りていくふりをした。娘はやって来た男にとっても小さな声で言った。「誰かいるわ!」「彼は降りていくぞ」と色男が答えた。「登っていくんじゃないの?」「僕が登っていくんだ。」「ああ! あなたは登っていくのね、で、もうひとり降りていくの? 誰なんだか知っておかないと。とても大事なことのよ。あなただと思ったものだから……。見てきて! 見てきて! ……」色男は降りていった。私はトイレに身を忍ばせて、彼が戻ってくるまでうずくまっていた。娘が小用を足しにきた。おそらくごく自然な本能から、したばかりの行為の跡を隠したかったのだろう。「誰もいないぞ」と色男が言った。「ああ、なんてことでしょう! 誰なのかしら? ……」私はあなただと思ったの!」「ちがうよ……。いったい何をされたんだ?」「あなただったらしたようなこと。」「それから?」「手を……なかに入れて……」「そして?」「手で……、体中を触ったわ。」「手でだけかい?」「私にこんなひどいことをできる人は家にはいないわ……。私、これからひとりで降りて行って、何か忘

れ物を取りに来たという口実でお店のご主人のところに戻ってくるわ。あなたは私の後から外に出て、私が帰ってくるときに誰か跡をつけてくるか、私を見ている人がいないか見張っていてちょうだい。もしそいつが私の後から〔建物に〕入ったら、通路の格子を開けてね。父と兄に捕まえさせるから。」この指示を聞いてから、私は音を立てずに降りていった。恋人の男はなおいくつか間い質していたので、私は玄關の戸まで行く時間があつた。「外に出て見ていると」娘が現れ、あたりを見回し、店の主人のもとへと立ち去った。私が彼女のことを観察していたのは、通りの向かい側からだつた。ついで、とてもハンサムな気取り屋が出てくるのが見えた。彼を見ると、私はもう良心の呵責をまったく感じなくなつた。彼は、オラトワール修道院に向いて出口のある〔建物の〕通路の見張りに立ちに行つた。私は彼の前を通りすぎ、誰か違う人に話すふりをして、彼の鼻先でこう叫んだ。「俺はあのおかま野郎から花の乙女を奪つたんだが、せいせいするね！」娘が帰つてきたのが見えた。気取り屋は彼女の後について入り、格子を閉めた。でも、彼は目的には達していなかつたのだ！ 私は、宿命的な帰結をもたらすべく四度格子を叩き、彼女の父と兄とが降りてくるようにした。その一瞬の後、気取り屋が外に出て逃げていくのが見えた。兄と父が間もなく現れた。私は彼らに衣類係の修道女が使う通路を示した。私が前日そこから観察していたこの通路に、色男は飛びこんだのである。父と兄は色男をそこで捉え、引きずりだし、誰であるかを知つて、彼を警備隊の所へしょつ引いて行つた。娘もそこに連れて行かれ、気取り屋の方は放免となつた。私は笑いながら家に戻つた。ちょうど喜劇で笑うように、つまり意地悪く笑いながら。」(I, 963-964)

(23) 実際には、パランゴン夫人は一七五六年八月にさらに第六子を出産している (I, 1340)。

(24) *Testud. op. cit.*, p. 459.

(25) *Ibid.*, p. 398, 403.

(26) 「おお、コレット！ 私にはもう罪はありません！ 私はもうあのこと〔夫人を犯したこと〕で自分を非難したりはしません！ 半身に暴力をふるつたおまえの半身 [La moitié de toi-même] を許してください！…… 私自身の親愛なる半身よ、許してください！ [……] ー」(I, 583) パランゴン夫人を自分の半身であると言つとき、レチフはそれまでの vous ではなくより親しい tu で夫人に語りかけている。

- (27) 十八世紀の新語である *romantique* はルソーの『孤独な散歩者の夢想』(第五)の有名な用例では当時の用法にならって風景に関して用いられているが (Rousseau, *op. cit.*, p. 1040, 1048)、『レチフはより現代の用法に近づけて心理に関して用いている (cf. N. I, 1325-1326)』。féique (夢幻的な) はレチフの造語と云う (I, 1419)。
- (28) レチフの記念日への偏愛は、たんに過去の記念ではなく、『一年後、この日、この時刻に私はなにを思うだろう?』(I, 480) といった、未来の感情への関心と不可分である。
- (29) Jean Charleux, « Le Roman de Marguerite Paris », *Études rétinienes*, n° 4-5, décembre 1986, p. 9.
- (30) *Le Drame de la vie*, 5 parties in 3 vol., 1793 [Slarkine Reprints], 1^{ère} partie, p. 38-39.
- (31) Charleux, *art. cit.* プレイヤツ版の註シヤルルールの調査に依拠しつつ (I, 1268-1269)。
- (32) *Le Drame de la vie*, *op. cit.*, p. 41-42.
- (33) 「『アメティスト』がいないときは、[……] アメリーが彼女の場所に座り、女主人の役割をしていた」(II, 311) で括弧を付したアメティストはアメリーと印刷されている。
- (34) *La Vie de mon père*, dans l'œuvre de Rétif de La Bretonne, t. II, édition établie par Daniel Baruch, Robert Laffont, « Bouquins », 2002, p. 108-109. 「『ムッシュー・ニコラ』では「夜」家族全員が集まるときである夕食がすむと、父は私たちのためにフランス語の本を読んでくれた」(I, 59) と簡潔に記されている。
- (35) *La Vie de mon père*, *op. cit.*, p. 80, 125-127. ただし、この父の悲恋は『ムッシュー・ニコラ』では漠然とほのめかされているだけである (I, 291, 894)。
- (36) ジョルジュ・ベンレカッサはレチフの文学を父性的起源に対する「代補」^{ミラマン}として捉え、起源(父、農民、自然)への帰属とそこからの切斷とを同時に表現する「妥協形成」の産物であると説く。レチフは父のように有徳で勤勉な農夫にはなれないので、作家になったのである。George Benrekassa, « Bénéfices romanesques, impasses idéologiques d'une origine indécidable: Rétif, « fils du peuple »? », *Études rétinienes*, n° 30, juin 1999, p. 38 et 41. Cf. Gisele Berkman, *Filiation, origine, fantasmе. Les voies de l'individuatiоn dans Monsieur Nicolas ou le cœur humain dévoilé de Rétif de la Bretonne*, Honoré

Champion, 2006, p. 16-17, 42-44.

(37) Testud. *op. cit.*, p. 86: 481-482.

(38) *Ibid.*, p. 590. レナフは『ムッシュ・ニコラ』で自分を「生きた書物」として読者に提示している (II, 630)。